



西松会新聞

The Yushokai Shimbun

第13号

令和2年(2020)3月1日発行



巻頭挨拶 P3

● 緒方 徹 (昭49卒 会長)：2020年に寄せて

小平 G 人工芝化への期待 P4

● 神谷 佳典 (平7卒)：人工芝プロジェクトの進捗状況

百年史秘話 P8

● 福本 浩 (昭52卒 編集長)：戦争の時代 ～ 部存続の危機

戦いを終えて P13

- 右田 大河 (4年 主将)：困難 P14
- 高山 修也 (4年 GM)：信じていること P15
- 石田 洸 (4年)：4年間の思い出 P16
- 尾高 洸祐 (4年)：記憶に残る瞬間 P17
- 城所 知希 (4年)：サッカー以外なんでもありませんでした P19
- 小杉 直輝 (4年)：夢に見る試合 P21
- 深井 雄太 (4年)：ア式人生の集大成 P23
- 森山 裕理 (4年)：早起きは辛くなかった P24
- 藤井 俊輔 (4年)：やってみて気づいた地域貢献の意義 P26
- 大澤 敦 (4年)：4ヶ月越しの対面 P31

令和2年度シーズンに向けて P33

- 山本 健太（3年 新GM）：「懸」 全身全霊を捧げ、1部へ

海外便り P36

- 重満 紀章（平7年）：グッドモーニング、ベトナム

自由テーマ P40

- 村上 仁（昭52卒）：サッカー部OBとは言い難いOB？ P40
- 小林 治（昭53卒）：海外で出会うサッカー部の不思議な縁 P43
- 進藤 潤耶（平11卒）：オーバーエイジは必要！ VARには制限を！ P46

私の学生 LIFE P49

- 斎藤 五樹（4年）：「FC ○○」 P49
- 石川 晃（4年）：事件のにおい、ぷんぷん P51
- 下地 政太（4年）：僕のア式飲み会人生 P52
- 杉山 恭平（4年）：メキシコが呼んでいる P54
- 中西 望（4年）：温泉としゃぶしゃぶ P56
- 渡邊 友彬（4年）：私をご飯に連れてって P58
- 菅家 恵（4年 MGR）：ア式独自文化 P60
- 下川 葵（4年 MGR）：現役時代のオフの過ごし方 P62
- 河原 岳大（2年）：束の間の休息 P64
- 山口 健介（2年）：不足 P65

追悼 P66

- 田中 好輔（昭41卒）：故清水征四郎君の霊に捧げる P66
- 高峯 文世（昭43卒）：一橋ア式蹴球部のレジェンド 清水さん P68
- 緒方 徹（昭49卒） / 山崎 彰人（昭49卒） / 加藤 富朗（昭52卒）

編集後記 P73

- 福本 浩（昭52卒 編集長）：試練の年、だからこそ！

2020 年に寄せて

緒方 徹（昭 49 卒 西松会 会長）



いよいよ東京オリンピック・パラリンピックが開催される年を迎えた。あのラグビーW杯で日本各地の多くの人たちが感動の声を上げたことを思うと、一部に批判的な意見もあるが、このビッグイベントに様々な人たちの期待が高まっていると言っていだろう。ところが、新型肺炎の感染拡大が予断を許さない状況になってきた。感染拡大を封じ込めることが出来るのか、有効な治療薬・方法は見つかるのか！？

“正しく恐れてほしい”という指摘はあるが、中国の政権だけではなく、大統領選挙の年であるアメリカ、そして世界が固唾を呑んでいると言ってもいい中で“日本が心配”などの専門家の声も出ている。日本は、これだけではなく様々な分野で順風とは言い難い状況もある。こうした騒然ともいえる中ではあるが、一橋大学ア式蹴球部にとっても、来年の創部100年に向けて、今年は人工芝問題を決着させる節目の年になる。寄付の勢いが鈍っていること、寄付した人たちの割合が低いことなど、これからゴールまでに難しい局面も予想される。OB・OG そして現役が、心を一つにして知恵を絞っていききたい。

新体制になった現役諸君は、既にリーグ戦での勝利に向けてスタートを切っている。元Jリーガーでテレビ解説でも活躍している戸田和幸氏に、縁あって新たにコーチとして指導してもらえることになった。強力な援軍であり、現役の皆さんは、これまでの教訓をぜひ活かして、長丁場になるが、一人一人が準備を積み重ね挑戦してほしい。

中国の王陽明（守仁）は朱子学を批判的に継承し「陽明学」を起こした。知と行を切り離して考えるべきではない「知行合一」と主張した。幕末維新の多くの志士たちにも陽明学は大きな影響を与えたことは、皆さんもご存じだろう。彼の言葉の一つに「事上磨錬」がある。実際に行動や実践を通して知識や精神を磨くという意味である。学問の修養について、日常の行為を離れて思索する「静坐」に対して、実際の日常の行動をこなし、これを通して修養するのが学問であると言っているのだ。日常生活を生半可な気持ちで送っていたのでは自分を磨くことはできない。日常生活で、自分を鍛え上げる良いテーマを持っていなければならない。そして自分の弱い心と闘い、必死に実践して体験する裏打ちがあつてこそ、自身が磨かれ、目的の達成に繋がるということだろう。

王陽明は、「山中の賊を破るは易し 心中の賊を破るは難し」とも言っている。優れた武人でもあった彼らしい比喻と言えるかもしれない。色々な価値観が錯綜している現代で、心の迷いや弱さを乗り越えてゆくというのは、普通の人間には中々難しい行動かもしれない。自分も含め、王陽明の言葉を心の片隅に思い浮かべながら、皆さんが自らを励まし、目的の達成に向かって、様々な分野で着実に前進してゆくことを心から願っている。

小平G人工芝化への期待

人工芝化プロジェクトの進捗状況

神谷 佳典（平7卒 人工芝担当幹事）



令和2年1月11日に開催されたOB・OG総会の中で、100周年記念人工芝プロジェクトについて報告いたしました。昨年の総会で決議して以来プロジェクトを推進してきましたが、皆様のご協力のおかげで、2月21日現在、サッカー部担当分 **7,500万円**の目標に対し、**140名**の方から**5,523万円**が集まり7合目まで達することができました。以下、これまでの進捗状況を記します。

2018年10月

＊アメリカンフットボール部と協議し、合同で小平グラウンドの人工芝化プロジェクトを進めることに合意。小平グラウンドを使用している他クラブからの了承を得る。

2019年1月～

- ＊OB・OG総会にて人工芝化プロジェクトが承認され寄附募集活動が開始される。
プロジェクトの総額を2.4億円と見込み、サッカー部は半分の1.2億円を目標とする。
総勢500名のOB・OGの6割にご協力をいただけるとして、1人当たり40万円の推奨額を設定。若手OBにも参画いただけるよう1口2万円とした。
・・・500名 × 6割 = 300名、1.2億円 ÷ 300名 = 40万円
- ＊東京都サッカー協会からグラウンドの使用権を条件に最大1.2億円支援の話を受け、大学側と交渉を開始する。
- ＊人工芝施工業者の提案を受け始める。下見・調査など1企業当たり2～3回の小平訪問を経て、合計4社を対象とする。

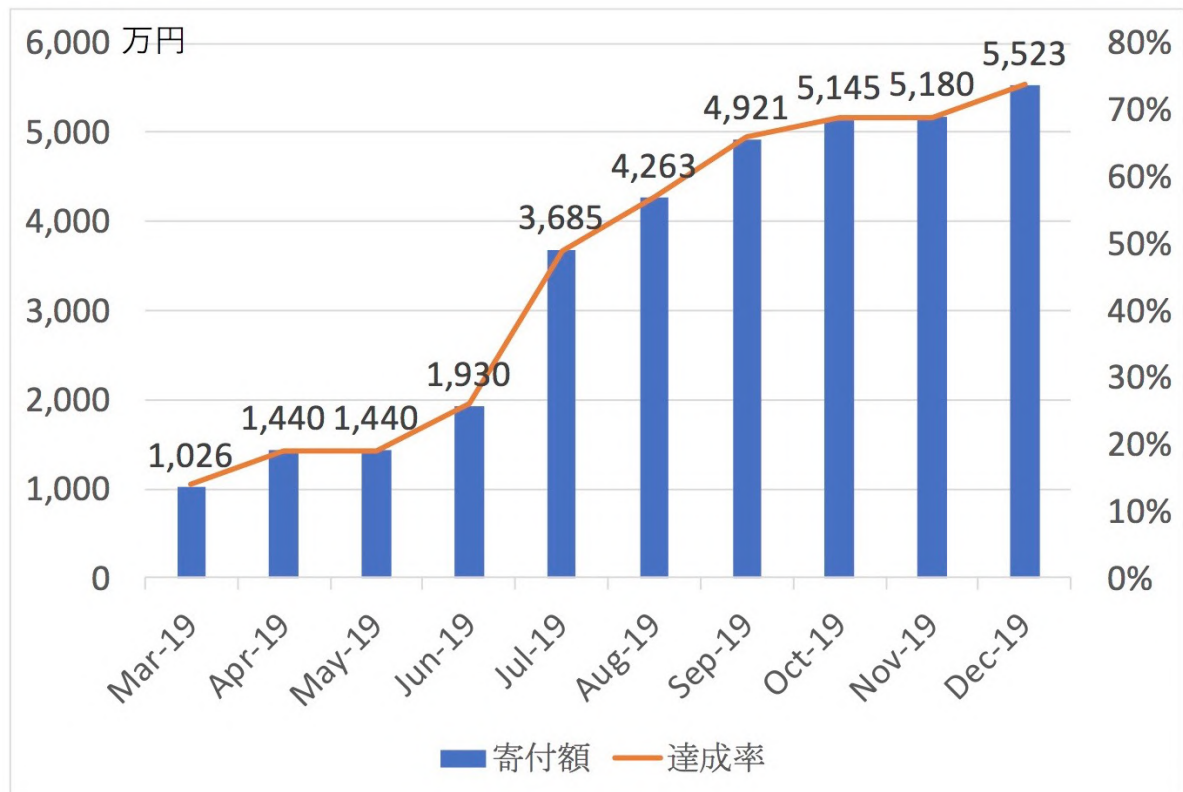
2019年10月

- ＊大学側と東京都サッカー協会の支援について交渉するも、結論に至らず、幹事会にて断念することに決定。
- ＊アメフト部がOB・OG説明会を実施し寄附募集を開始する。

2019年12月

- ＊施工企業4社のプレゼンを実施。再見積もりによって総額は1.5億円となり、サッカー部の負担額は半分の7,500万円となる。
今後は2社に絞り、再度条件を揃えて見積もりをしてもらい決定する予定。

【寄附活動の軌跡 2019年】



【寄附額の現状】

卒 年	名 簿	寄附者	寄附率 %	寄付額	1 人当たり
昭和 17年 ～ 29年	18	0	0.0		
昭和 30年 ～ 39年	58	21	36.2	7,670,000	365,238
昭和 40年 ～ 49年	61	30	49.2	13,870,000	462,333
昭和 50年 ～ 59年	97	33	34.0	13,730,000	416,061
昭和 60年 ～ 63年	32	4	12.5	1,700,000	425,000
平成 1 年 ～ 9 年	83	29	34.9	7,090,000	244,483
平成 10年 ～ 19年	79	9	11.4	650,000	72,222
平成 20年 ～ 30年	110	10	9.1	400,000	40,000
OB・OG 計	538	136	25.3	45,110,000	331,691
父兄ほか		4		10,120,000	
総 計		140		55,230,000	400,217

＊昨年12月末現在、140名 5,523万円。

目標の7,500万円を達成するためには、現在25%の寄附率を50%に引き上げる必要あり。

【寄附額の年次別一覧】

卒 年	名 簿	寄 附	寄附率	卒 年	名 簿	寄 附	寄附率	卒 年	名 簿	寄 附	寄附率
昭和 17 年	1		0.0	昭和 43 年	5	5	100.0	平成 6 年	8	3	37.5
昭和 18 年				昭和 44 年	5	2	40.0	平成 7 年	17	11	64.7
昭和 19 年	1		0.0	昭和 45 年	9		0.0	平成 8 年	7	2	28.6
昭和 20 年				昭和 46 年	11	8	72.7	平成 9 年	16	2	12.5
昭和 21 年	2		0.0	昭和 47 年	2	1	50.0	平成 10 年	8		0.0
昭和 22 年				昭和 48 年	3	1	33.3	平成 11 年	4		0.0
昭和 23 年	4		0.0	昭和 49 年	10	8	80.0	平成 12 年	11		0.0
昭和 24 年	1		0.0	昭和 50 年	7	3	42.9	平成 13 年	13		0.0
昭和 25 年				昭和 51 年	11	4	36.4	平成 14 年	7	6	85.7
昭和 26 年				昭和 52 年	14	7	50.0	平成 15 年	3		0.0
昭和 27 年	2		0.0	昭和 53 年	9	4	44.4	平成 16 年	7	1	14.3
昭和 28 年	4		0.0	昭和 54 年	10	2	20.0	平成 17 年	5		0.0
昭和 29 年	3		0.0	昭和 55 年	7	3	42.9	平成 18 年	11	1	9.1
昭和 30 年	1	1	100.0	昭和 56 年	8	3	37.5	平成 19 年	10	1	10.0
昭和 31 年	6	3	50.0	昭和 57 年	5	3	60.0	平成 20 年	14	3	21.4
昭和 32 年	4		0.0	昭和 58 年	11		0.0	平成 21 年	9	2	22.2
昭和 33 年	4	1	25.0	昭和 59 年	15	4	26.7	平成 22 年	9	1	11.1
昭和 34 年	3		0.0	昭和 60 年	4		0.0	平成 23 年	8	2	25.0
昭和 35 年	8	4	50.0	昭和 61 年	8	1	12.5	平成 24 年	9	1	11.1
昭和 36 年	8	4	50.0	昭和 62 年	7	2	28.6	平成 25 年	7		0.0
昭和 37 年	7	2	28.6	昭和 63 年	13	1	7.7	平成 26 年	7		0.0
昭和 38 年	7		0.0	平成 1 年	5	6	120.0	平成 27 年	10		0.0
昭和 39 年	10	6	60.0	平成 2 年	7	1	14.3	平成 28 年	12		0.0
昭和 40 年	5	3	60.0	平成 3 年	12	2	16.7	平成 29 年	12		0.0
昭和 41 年	5	1	20.0	平成 4 年	6	1	16.7	平成 30 年	13	1	7.7
昭和 42 年	6	1	16.7	平成 5 年	5	1	20.0				

年次ごとの寄附募集率に格差がありますので、横のつながりで同期に声をかけていただき、裾野を広げていければと思います。引き続きご協力のほどよろしくお願いいたします。

今後のスケジュールは以下の通りです。

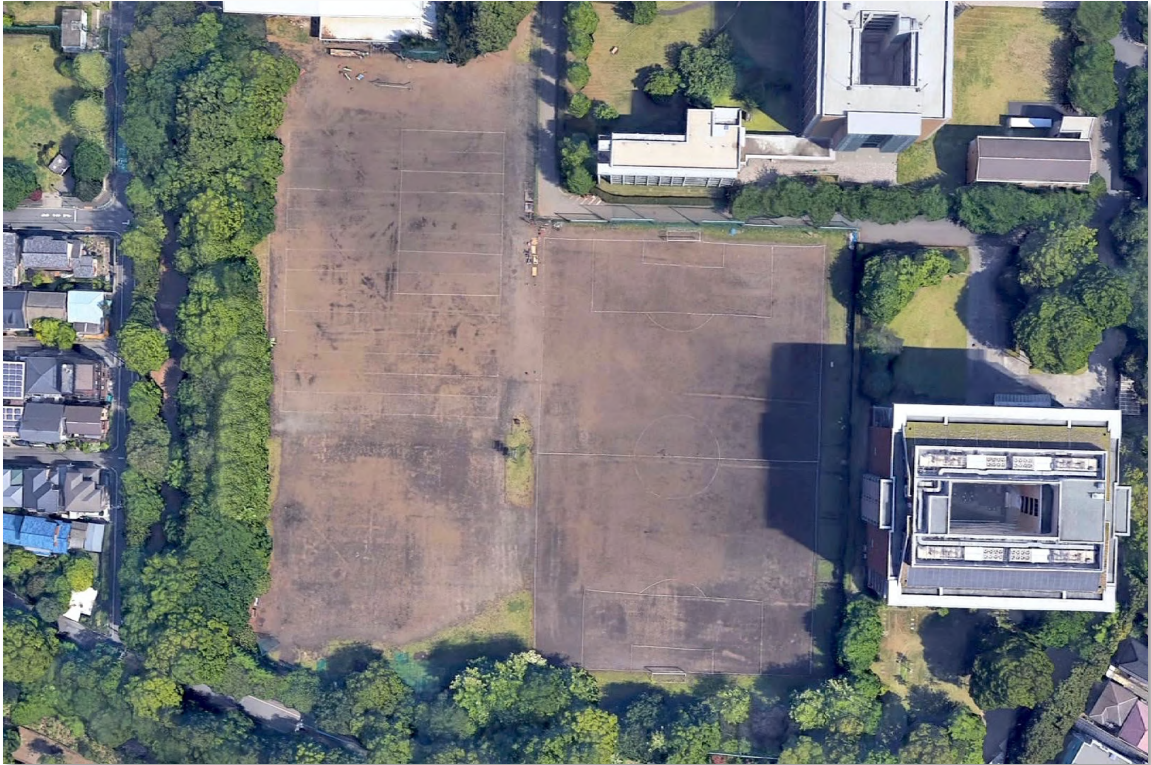
＊2020年9月 ：寄附募集完了・施工企業に発注。

＊2020年12月

～ 2021年3月：人工芝の施工

＊2021年3月 ：竣工

こけら落としのOB戦・総会、および100周年記念行事を2021年3月開催で検討しています。



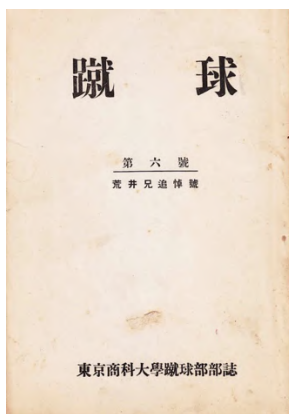
小平グラウンドを人工芝に！



戦争の時代 ～ 部存続の危機

福本 浩（昭 52 卒 編集長）

昭和 15 年（1940）商大サッカー部は、関東大学リーグ 1 部で準優勝を果たしサッカー部史上最高位の大記録を打ち立てた。しかしその黄金期は、「戦争の時代」でもあった。昭和 12 年に日中戦争が始まり、昭和 16 年には太平洋戦争に突入。そして終戦に至るまでの間、多くの先輩たちが戦場で命を落とした。昭和 14 年刊の部誌『蹴球』第 6 号は、中支戦線で戦病死した荒井文雄（昭 12 卒）の追悼号になっている。



この激動の時代を、『60 年史』を参考にしながら、さらに詳しく辿ってみよう。



昭和 15 年（1940）

学生の徴兵は 26 歳まで猶予されていたが、徐々に戦時色が部生活に波及してきた。

ユニホームはペラペラのスフ

（staple fiber の略 化学繊維のこと）で、サッカー靴も牛皮から豚皮になる。

（のちには馬皮、ついには鮫皮に）。

「ボールはさすがに牛皮だったが、練習の時のボールは皮が薄くなって倍くらいに膨れ上がった代物。軽くて大きいため蹴ってもスピードが出ず、風が強いとあらぬ方向に流されていく。極端に言えば風船玉の固いものと思えば良い」

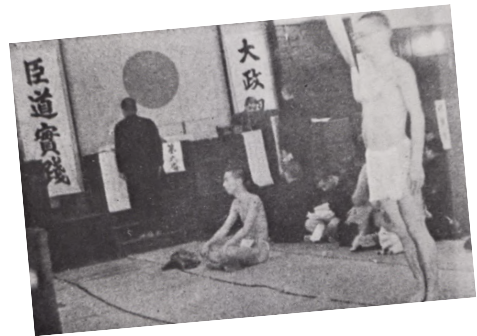
・ ・ 鷺埜 和夫（昭 19 卒）

昭和 16 年 (1941)

12 月 8 日、太平洋戦争に突入。

すでに学生の徴兵猶予は撤廃され、同年 10 月に
大学・専門学校の修業年限が 3 ヶ月間短縮。

12 月に卒業となった学生を対象に徴兵検査が行われ、
合格者は翌年 2 月に入隊。大学生にとっては、
卒業即軍隊生活の時代になっていく。



昭和 17 年 (1942)

予科も修業年限が 6 ヶ月間短縮され、9 月卒業、10 月入隊の措置が取られる。

このため毎年秋に行われていた関東大学リーグ戦は、春に実施されることになった。



昭和 18 年 (1943)

4 月、戦局の激化に伴い予科の修業年限が 2 年となる。

10 月には卒業までの徴兵猶予が撤廃され、

20 歳以上の文科系学生が在学途中で徴兵される。

そして 10 月 21 日、関東大学サッカーリーグが開催
された明治神宮外苑競技場（現国立競技場）において
7 万人に及ぶ関東地方の入隊学徒の「出陣壮行会」が
挙行された。

運動部にも数々の制約が加えられ、ラグビー以外の外来スポーツが禁止になる。
サッカー部は冬から「滑空班 (グライダー部)」として活動し、再びボールを蹴る日に備えて
体力の維持増強に努めたというが、密かにボールを蹴っていたと思われる記述もある。

「我々は部生活の根を残すことを考え、サッカー部を中心として滑空班を組織した。
ところが練習用のプライマリーグライダーは第1回の練習で壊れてしまい、修理に出した
はずが遂に戻ってこなかった。私たちは保管してあったボールを持ち出してサッカーを
始めた。靴も不足していたので全員裸足で蹴っていたが、それで結構面白かった」

・高柳 晋 (昭23卒)

昭和19年 (1944)

3月に小平の予科校舎が軍に接収され、学生は国立へ。

以後、運動部の練習の本拠は国立の陸上競技場と野球場になる。しかし、

「出陣学徒壮行会」以降、学生が続々と入営し、サッカー部員はわずか7～8名。

事実上チーム編成が不可能になった。他の大学も同様の状況で、リーグ戦も中止となる。
やむなく休部を決意した部員たちは、創立メンバーであり、後輩たちを物心両面で支えていた
大先輩、松本正雄 (大15卒) に相談したが、ひどく叱られたと言う。

「君らは何を言うんだ。出征した先輩たちの
魂の拠りどころがなくなってしまうではないか」



出征先輩の武運長久祈願

昭和18年1月31日 鎌倉鶴岡八幡宮



故 松本正雄 享年94

部員たちは一旦引き下がったが、どうすることもできなかった。

昭和 19 年の夏休みを過ぎる頃から本格的な勤労働員が行われ、部活動は完全に停止。

9 月、東京商科大学から東京産業大学に改称。11 月 24 日から翌年の終戦の日まで、アメリカ軍による東京空襲が 106 回も続く。

昭和 20 年 (1945) 8 月 15 日、終戦。

軍に接収されていた小平グラウンドには、破壊されたサーチライトの破片が散乱。

とても練習ができる状態ではなく、戦後の混乱で物資も乏しい中、再び使えるようになるまでには、7 年の歳月が必要だった。

《 関東大学サッカーリーグ 》		
昭和 10 年 (1935)	1 部	5 位：1 勝 4 敗
昭和 11 年 (1936)	1 部	5 位：2 勝 3 敗
昭和 12 年 (1937)	1 部	最下位：0 勝 5 敗
昭和 13 年 (1938)	2 部	優勝：5 勝 0 敗
昭和 14 年 (1939)	1 部	5 位：1 勝 2 分 2 敗
昭和 15 年 (1940)	1 部	準優勝：3 勝 2 敗
昭和 16 年 (1941)	1 部	4 位：1 勝 2 分 2 敗
昭和 17 年 (1942)	1 部	最下位：1 勝 1 分 3 敗
昭和 18 年 (1943)	2 部	優勝：3 勝 0 敗
昭和 19 年 (1944)	～ 戦時休止 ～	
昭和 20 年 (1945)	～ 戦時休止 ～	

昭和 9 年の春、小平に造られた

新しいサッカー専用グラウンドで練習を開始。

昭和 10 年、現在まで 85 年にわたって続く
関東大学サッカーリーグがスタート。

そして戦争の時代、先輩の戦死に泣き、

自身の応召を待ち、窮乏に耐えながら、戦った。

しかし部は、廃止されるかどうかの瀬戸際まで
追い詰められた。

それでも、今につながる一橋大学ア式蹴球部の伝統が、この時代に培われた。

昭和 14 年に商大予科に入学した鷲埜 和夫 (昭 19 卒) は、『60 年史』にこう記している。

「大変きつい練習だったが、当世言われるシゴキとは別世界であった。

きびしい中にも和やかで、のびのびとしたふんいがあり、

それでいて良き秩序が保たれてた。

もともとあまり健康ではなく、また部に入るまで

ボールを蹴ったことがなかったので

随分苦痛に感じたものである。

それが最後まで続いたのは、やはり言うに言われぬ

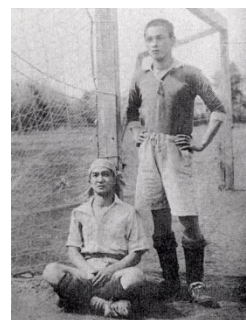
サッカー部のふんい気であり、友情であったと思う。

おそらく部員の中で最も下手な、

そして最もだらしない一員であったと思うが、

その後の人生で心の支えになったのは、

この時代のサッカー部の生活であったことは間違いない」



来年、わが一橋大学ア式蹴球部は創設 100 周年を迎える。
その記念事業である「小平 G 人工芝化プロジェクト」が、
実現まであと一歩というところまでできている。

ここで、改めてもう一度、小平グラウンドに刻まれた
大先輩たちの艱難辛苦に思いを馳せたいと思う。



戦いを終えて

平成31年 & 令和1年度シーズン

東京都リーグ2部：4位 9勝7敗2分

	朝鮮	成蹊	亜細亜	成城	玉川	首都	武蔵	日大商学	日大文理
春	● 0-3	○ 3-2	△ 0-0	○ 1-0	○ 1-0	○ 4-1	○ 3-1	○ 2-0	○ 3-1
秋	● 1-3	● 1-3	● 1-2	● 0-2	● 1-2	○ 2-0	● 0-4	○ 3-0	△ 0-0

＊春季（前期）リーグ戦は7勝1分1敗で、朝鮮大学に次ぎ2位だったが、
秋季（後期）はケガ人が続出し、失速してしまった。

＊反省点としては、多彩な攻撃の欠如、ゴール前のプレイ精度の悪さ、
守備においては組織的な守備やボールの支配ができなかったことが挙げられる。
（OB 総会でのプレゼン資料「2019 シーズン総括」より）

順位	大学	勝点	勝	負	分	得点	失点	差
1	朝鮮大学	45	15	3	0	60	21	39
2	成蹊大学	43	14	3	1	59	15	44
3	亜細亜大学	38	12	4	2	56	18	38
4	一橋大学	29	9	7	2	26	24	2
5	玉川大学	29	9	7	2	36	25	11
6	武蔵大学	25	8	9	1	34	27	7
7	成城大学	25	7	7	4	30	48	-18
8	首都大学東京	14	4	12	2	15	37	-22
9	日大商学部	6	1	14	3	13	68	-55
10	日大文理学部	6	1	14	3	10	53	-43

困難

右田 大河 （4年 主将）



戦いを終えてということなので1年間を振り返り、そして今思うことを書きたいと思います。まずはOB・OGならびに保護者の方々、1年間多大なるご支援ご声援のほどありがとうございました。絶望感・期待感・喪失感、そして不思議と最終的に味わった達成感、この1年本当に様々な経験をしました。

まずは4部相手に敗退に終わった東京都トーナメント。1部昇格という目標を掲げていた自分たちには屈辱的すぎる結果でした。しかし今振り返ってみると、この焦りが絶対に叶えたい1部昇格という目標に向かってみんなが真剣に考えるきっかけになり、前期リーグの結果を生み出したといっても過言ではないと思います。来る日も来る日も同期とミーティングを重ね、自分たちの思う理想のチーム像、そしてそこに辿り着くまでのプロセスをしっかりとイメージできるようになっていきました。

その成果はすぐに現れ、2月中旬に行う関西遠征以降、リーグ戦までの練習試合をトップチームは無敗で乗り切り、そのままの勢いで前期リーグを7勝1分1敗で終わりました。しかし、後期リーグは怪我人の続出などもあり、なかなか勝てず、最終的に1部昇格という「結果」は出せませんでしたが、そこに至るまでの「過程」には一定の達成感を覚えることができました。

主将としては部員全員が同じ目標を掲げ、それに向かって本気で取り組める雰囲気と環境を作りたかったのですが、想像以上に難しかったです。1つの例として今年一番考えることが多かったのがマネージャーについてです。関西遠征での縦割りのミーティングがマネージャーについて深く考えさせられるきっかけとなり、マネージャーの存在意義・目標といったものが何なのか意識するようになりました。

マネージャーは目に見える成果がある訳でもなく、テーピングをしたり、真冬にアイシングの氷を作ったりすること自体が好きな子は多分いません。プレイヤーのように単に自分の好きなサッカーをやっていればいいというものでもなく、その仕事に対するやりがいや価値を見出せてはじめてア式に所属している意味を自分で理解できるものだと思います。マネージャーの中にはその価値を見つけれずにいる人もいます。そこから生まれるプレイヤーとの温度差がチームに与える影響は小さくないですが、私はこの1年で、その差を埋めきることはできませんでした。

この問題を含め、ア式がさらに上を目指して行く上で様々な課題がありますが、後輩たちには一つ一つクリアしてってもらい、近い将来「関東リーグ」で一橋の名前が見られる日を楽しみにOBとして応援していきたいと思います。本当に1年間ありがとうございました。

信じていること

高山 修也 （4年 GM）



先ずは僕たち現役の活動を暖かく見守ってくださった全ての皆様へ、この場を借りてお礼申し上げます。本当にありがとうございました。

シーズンを振り返る今、様々なことが蘇ってきます。特に前期リーグの快進撃と中断期間に鎖骨を折ったことは、この先もずっと心の中に残り続ける出来事だと思います。

「戦いを終えて」ということで、シーズンの総括をするべきだとは思いますが、総括は先日の総会の方でやらせて頂きました。加えて、このような機会を頂くのも最後ということもあり、次のア式を背負う後輩たち、ひいてはこれから入部してくる部員たちの活躍に繋がたいという思いもありますので、今回は僕が描く未来のア式像について書こうと思います。

総会の方でも少し触れましたが、ア式には、これからも「関東リーグを目指す組織」であってほしいと思います。今はまだ手の届かない舞台かもしれませんが、少しずつ差を埋めていけば不可能ではないはずです。一橋大学は推薦制度がない他、関東リーグに所属する大学と比べ選手のポテンシャルや練習環境などにおいて大きく差をつけられています。ですが少し視野を広げれば、関東のチームと互角以上に渡り合えるフィールドがあります。

戦術理解や組織力、チームへの愛着など、無数の要素が組み合わさって勝負が決まる、それがサッカーです。去年取り組んだ戦術ミーティングも、ゲームモデル作成も、あくまでその差を埋める1つの取り組みに過ぎません。何が正しい方法かはわかりませんが、現役はそれを絶えず模索してください。チャレンジしてください。次の代に繋がる戦術やア式への愛着を蓄積してください。その小さな積み重ねが、やがて大きな差を生むことを信じて前に進んでください。

OBの皆様には今までと変わらぬご声援をお願い申し上げます。

そしてこのような関係性こそがア式に発展と進歩をもたらし、未来の関東リーグ昇格に繋がるのだと信じています。もちろん僕自身もできる形で現役のサポートをしていきたいと思います。間違いなくア式で得られたものはとても貴重であり、これからもこの組織が正しいということを証明するために日々精進していこうと思います。

OBの皆様、共にア式を盛り上げていきましょう。どうぞ宜しくお願い致します。

来季もア式の部員全員が楽しく活動できますようにと願いを込め、終わりにさせていただきます。ありがとうございました。

4年間の思い出

石田 洸（4年）



毎日のように仲間とボールを追いかけていた日々が、私のア式での思い出です。私は高校時代、サッカー部には所属していませんでした。

そのため入部当初は体力・技術ともに他の選手を遥かに下回り、チームメイトに迷惑をかけてしまいました。「自分が部活に所属していいのか？」とも考えました。しかし、そんな自分を先輩や同期は同じプレイヤーとして対等に扱ってくれました。そのおかげで、4年間を通して自分が想像していなかったほどに成長できました。

今後の人生でア式での4年間ほど真剣にサッカーに取り組むことは、おそらくないと思います。大好きなサッカーをした最高に熱い4年間は、私にとっての宝物です。最高に面白い同期、後輩、先輩と過ごした日々も、強く記憶に残っています。

毎回の練習のダウンの時に他愛もない話をして爆笑していました。人生でこんなに笑い続けた日々は初めてでした。城所の夏合宿での事件とか、深井が陰キャラ（陰気な性格の人）と友だちになったこととか、藤井がスパイク忘れを隠すために怪我したと言って練習を見学するなどの嘘をつきまくりカレーを食いまくったこととか、同期との面白かった出来事は無限に思いつきます。ア式の魅力はピッチ上だけでなく、ピッチ外にもあるのだと心の底から思います。

後輩は後悔しないようにサッカーをひたすらに楽しんで欲しいです。

OBとして昇格する瞬間を見られることを心から願っています。多くの先輩、OBの方々のおかげで、最高に熱い4年間を送ることができました。本当にありがとうございました。

＊3年次の関西遠征で



記憶に残る瞬間

尾高 洸祐 （4年）



この4年間は短かったという人もいれば長かったという人もいます。個人的には長い派でした。入部したのが遥か昔のようにも感じられ、サッカーはもちろん、サッカー外の部分でも、いろいろな思い出があります。さて皆さんは、「ア式の4年間で一番記憶に残っている瞬間」と言われたら、どのシーンが頭に浮かびますか？人によってはスーパーゴールを決めたシーンかもしれません。人によっては練習後に「武」でうどんを食べ、みんなと話しているシーンかもしれません。僕の場合は、今ぱっと思い浮かぶ印象的なシーンが2つあるので、それらについて書かせていただこうと思います。

まず1つ目は紅白戦。特に4年になってからの紅白戦が、まず思い浮かびます。4年になって初めてA2のカテゴリーでサッカーをすることができました。もちろんA2では不十分であるという指摘もあるでしょうが、それまでの3年間の殆どを一番下のカテゴリーで過ごした身としては、最後までA2の選手としてA1との紅白戦を戦うことに、慣れることがありませんでした。最高学年にしてようやくこのカテゴリーに行きついたということは、A2内で1番サッカーがへたっぴであることは自明で、最高学年が足を引っ張らぬよう、前線の後輩たちが自由にプレーできるよう、せめて守備や走るところで頑張り、どうにかこうにかなればいいなと、そんな想いでサッカーをしていたように思います。マッチアップが毎回同期の城所だったのことも良い思い出ですし、皆で試行錯誤しながらチームを作れた感覚があり、とても楽しい1年間でした。

2つ目は3度出場することができたリーグ戦です。

3年次春のvs 首都大、そして4年次秋のvs 朝鮮大とvs 武蔵大の3試合です。

上の選手の怪我や就活、出場停止などで本当に突然機会が転がり込むことがありました。

本当の本当に突然で、試合の1週間前は一番下のカテゴリーのB2でプレーをしていました。もちろんリーグ戦に出たいという気持ちがなかった訳ではありません。しかし、日頃一番下のカテゴリーでプレーする選手が、突然リーグ戦となると嬉しさよりも恐怖が勝ります。1週間、リーグ戦の不安につきまとわれます。バイト中や授業中にもずっと考えてしまい1人になると不安になるので、練習後も皆といるために普段は節約して行かないご飯にいくなどしていた記憶があります。引退した今となっては信じがたいですが、それほどサッカー中心の生活になっていました。へたっぴな僕は1週間万全な準備をして、当時の自分が出せる力の本当に100%を試合で出したと思っています。あの3試合及び準備の1週間に関しては一抹の悔いも残していません。もちろん、もっと経験があればもっとうまくできたのかもしれないですが、あれが当時の限界だったと言えます。

1 週間という短期においては、全く悔いを残さない準備・活動をすることができました。しかしながら、そうした経験をしたがゆえに、長期にわたってはこの活動ができなかったという悔いも新たに生まれます。この期間の差こそがプレイヤーとしての差なんだろうと感じており、これを読んでいる後輩がいたら、ひとつの意見として頭の片隅においてくれたらと思います。ア式の思い出として書かせていただきました。まとまりのない駄文となりましたが、ご容赦ください。読んでくださった方には感謝申し上げます。

2018 年 6 月 3 日 リーグ戦に初めて出場した 3 年次春の vs 首都大



サッカー以外なんでもありませんでした

城所 知希 （4年）



4年間の思い出を語ろうにも4月7日??に入部して10月20日に引退するまでの生活をア式に捧げ、引退後もほぼ毎日練習に行き、プレイヤーとして関西遠征にも参加する予定の自分にサッカー以外のことがあるわけがない。同期にはサッカー馬鹿って呼ばれます。（老害とも、）学年旅行で沖縄に行き、卒業旅行でグアムにも行ったが、その楽しさはサッカーには及ばなかった。10年、20年と時間が経っても、思い出として最初に思い出されるのはリーグ戦のことであり、きつすぎたラントレだと思う。18年間サッカーと共に過ごしてきた自分にとって、サッカーに勝るものは何もなかった。そんな自分のア式の4年間を振り返ってみようと思う。

1年目：「地獄」

周囲には、不遇の1年と言われている。同期の誰よりも早くベンチ入りを果たすものの、1年間の総出場時間10分ほど。そんな屈辱的な扱いを受けたことや大学サッカーに適応する過程で、膝の靱帯を怪我するといった苦しい時期を過ごしたものの、翌年の飛躍の土台を作り上げる1年となった。加えてクリスマスイブに彼女に振られるという、メンタル強化のためのイベントもあった。

2年目：「自信」

たった9試合ではあったが1部の舞台を経験する。自分がリーグ戦の舞台で戦えることを示すのに必死だった。強い相手を前にして必死だった。全力バック案件（これは相手がうますぎるから全力で自陣に戻ろうということ）が毎試合の振り返りで出るといふ、とんでもない9試合だったと思う。気づけば前期リーグ得点王トップタイになり、都選抜にも推薦された。「俺はやれる、通用する」と確信したシーズンになった。自分がシュートを打たないとチームは負けるといった謎のジンクスもささやかれていた。Ifはないけれど活動停止処分がなかったらどこまで行けたのかっていうのは考えずにはいられない。（前期終了時、参入戦進出の4位まで勝ち点2差）初めて累積出場停止を食らった。（後期第1節は不戦敗のため実害はなし）

3年目：「くやしさ」

主力として戦う初めての2部の舞台。関西遠征で骨折した自分は開幕に間に合わなかった。1部でやれた自分たちは大きな壁にぶつかることとなる。試合になぜか勝てなかったのだ。自分も思うように点を決めることができなかった。うわさでは、歴代9番は思うように結果を残せない「9番の呪い」というのがあり、その影響かと。リーグ戦の難しさを痛感し、とてつもないくやしさを味わった。それでも「2部優秀選手」といった個人タイトルを獲得する事ができた。累積出場停止にリーチの状態が12試合続いたのは、さすがにきつかった。

4年目前期：「覚醒」

チームはリーグ2部の2位、自分は単独得点王（8得点）を獲得。

背番号7を背負い、チームとして結果を残せるラストチャンスという覚悟をもって臨んだ。

ありえないほどの出来だった。普段は決まらないシュートがなぜか入るし、自陣のペナルティーエリア付近から独走し4～5人抜いてゴールを決めるなど、控えめに言っても神がかったといえる。1部への道のりはそんなに甘くないけれど、望みをここまでつなぐことができた。

チャンスは、まだあったはずだった、、、

4年目後期：「大失速」

結果リーグ4位。まったく勝てなかった。けが人がトップに続出し、結局ベストメンバーで一度も試合ができなかった。チームを1部の舞台に連れていくことができなかった。

いろいろ要因はあるけれど、一言でいえば自分の力が及ばなかった、ただそれだけだろう。

それでも個人としては得点ランク2部3位、2桁得点（10点）と、それなりの結果は残せたのではなからうか。最期まで自分らしさは貫けた。チームの結果には満足していないが、

1プレイヤーとして胸を張りたい。ところで、この年に行われた200×8というラントレは人生で一番苦しかった。これ以上苦しい事は、もうないと思う。



結果至上主義の自分から言えば、4年間の取り組みは正しかったとは言えないかもしれない。ただこの部活が、そして最高の仲間との出会いが、プレイヤーとして、また人として成長させてくれたのも事実。こんな素晴らしい出会いや経験をさせてくれたのは、「年中」から続けてきたサッカーであることも、また事実。そして何より馬鹿みたいに週5でサッカーし続けられるのも卒業まで。これから先もサッカーは続けていくだろうし、サッカーを通して様々な出会いがあると思う。今までのことに感謝していくと共に、未来に向かって邁進していくつもりである。

でも、せっかくの機会だし、言っておこう。

「4年間、そして18年間、お疲れ。」

これからも自分らしくがんばれよ」

夢に見る試合

小杉 直輝 （4年）



昨年の10月に物心ついた頃から続けてきたサッカーを引退しました。個人的には納得いく結果を残すことはできなかったけれども、自分の中では非常に価値のある4年間だったと考えています。引退してからはサッカーから離れ自堕落な日々を送っていますが、そんな生活の中でも未だに夢に見る試合があります。国公立戦決勝の東京学芸大学戦、そして引退試合となった横浜国立大戦の2試合です。

前者は、B1が闘った公式戦で、ピッチにはたくさんの同期、ピッチの傍ではリーグ戦後で疲れているはずのメンバーが声を枯らして応援してくれる、そんな環境の中での試合でした。試合を支配しつつも後半に崩れ、0：3での敗北。4年間で一番悔しい敗北でした。この試合が夢に出る日は、悔しさと自分への怒りとがグチャグチャに交じった感情と共に目を覚まします。相手のヘディングがゴールに刺さる瞬間が、何度も夢の中で繰り返されます。今もまだ悔しさが強く残っており、あの試合のビデオはまだ見ることはできませんが、しっかりと向き合い自分の糧にする必要があると思っています。この試合で経験した悔しさは自分の中に永遠に残り続け、きっと自分の原動力になってくれるはずだと信じています。

*2019年10月6日 国公立戦決勝 vs 学芸大



後者の横浜国立大戦は、Bチームに所属する4年生の引退試合でした。同じピッチに立っていた後輩たちに、僕たち4年生の熱を伝えられた試合だったと自負しています。夢では、自分の倒れ込みながらのパスから同期の深井がゴールを決めているシーンや、恭平のゴールに城所が泣き叫んでいるのを、よく思い出します。公式戦でもないってしまえばたかが練習試合で、ここまで感情を揺さぶることがあるのかと素直に感激した瞬間です。円陣での深井の涙も含めて、一生忘れられない試合です。

2019年10月19日 vs 横浜国立大

4年生：#17 小杉、#8 下地、#15 深井、#19 中西



嬉しかった記憶も、悔しかった記憶も、時間が経っても鮮明に思い出すことができるのは、自分がア式蹴球部を大好きだったからだと改めて思います。昨年卒業された玉水さんが、「人はかけた時間と労力だけ、その組織に愛情を感じる」とおっしゃっていましたが、本当にその通りだと。右も左も分からないまま飛び込んだ大学サッカーでしたが、向き合った時間と労力の分だけ、ア式を心の底から大好きになれました。

言葉で言うと安っぽくなってしまいましたが、ア式蹴球部が心の底から大好きだと改めて実感します。前述したような悔しい想いをサッカーで取り返す場は残念ながらもう残されていないので、ア式で得たものを活かして、一人の社会人として大きな成果を残せるように、全力で社会人生活を頑張りたいと思います。最後にこの場を借り、これまでご支援いただいたOB・OGの方々に感謝の言葉をお伝えしたいと思います。4年間ありがとうございました。私も来年以降ア式蹴球部の発展に尽力していきますので、どうぞよろしくお願い致します。

⚽ ア式人生の集大成

深井 雄太 （4年）



4年間のア式人生の最後の試合となった、
横浜国立大学との試合後に思ったことを書きます。

普段から昨年度主将の右田が、“最後終わったときに何かしら感情を持て”と言っていた。
いつもあまり感情を持たない僕が、引退後に何を思うのか、楽しみと不安を感じていた。
実際終わってみて感じたことは、“ア式が心の底から大好きだ”ということだった。

小中高と部活動に所属していたが、その時は主体性なんてものは欠片もなく、
周りに言われた通りの受け身でサッカーをしていた。大学に入って、自分たちで全部考えて
チームを作っていくア式にとっても魅力を感じ、愛着と貢献したいという気持ちが強くなった。

実際たった5分の成蹊戦以外、リーグ戦にもほとんど絡めてないし、
プレーで何かできたとは思えない。何の結果も残してないから、この4年間に意味なんてない
のかもしれない。でも、このチームが好きだし、もっとこのチームの一員でいたかった。

最後のTM横国戦ではケガをしながら最後に出たり、
全然決めていないのに最後の最後で点を取ったり、次の日にリーグ戦があるのに声が枯れる
ぐらい応援してくれる同期がいて、もっと一緒に居たいと思った。リーグ最終節の武蔵大戦の
あと、みんなからもらった色紙を読んで、色々な思い出が蘇った。いつも飄々として何も考えて
ないように見える自分でも、こんなにも心が動かされるとは思っていなかった。

ありきたりだけど、後輩たちにも、最後このチームを最高に好きであって欲しいと思う。
それは、各々がどれだけチーム作りに関われたか、どれだけ真剣にサッカーに取り組めたかに
かかっている。もちろん公式戦に出てチームに目に見える形で貢献することが一番大事なこと
である。でも、そこに向かって頑張ること、チームとして強くなる為にピッチ外で仕事をする
こと、こういう地道な積み重ねこそが、みんなの4年間をかけがえのないものにすると思う。

後輩のみんなは最後に胸を張って終われるように、精一杯頑張ってください。
そして、1部昇格を成し遂げてください。試合や練習にちょくちょく顔出します。

早起きは辛くなかった

森山 裕理 （4年）



引退して4ヶ月ほどが経ちまして、毎日練習のために5時前後に起きていた頃に比べて、2時間ほど遅い7時頃に目を覚まします。

引退前とは違い、すぐには布団から出ずゴロゴロしており、布団の中の偉大さを実感している毎日です。こんな前置きはさておき、引退した現在の率直な気持ちを綴りたいと思います。

私は浪人をして一橋大学に入学したのですが、浪人期にサッカーがやりたすぎて、すぐにア式の練習に参加しました。そこで驚いたことは練習が基本的に朝練であり、開始時間が7時半という早さに加えて、1年生は全体集合から30分早い「1年集合」というものがあることでした。私の家は神奈川県の大観光スポットである鎌倉にあり、家から通うとなると2時間がかかります。大学は自宅から通学することを両親と約束していたので、とんでもない早起きを4年間続けなければいけないことになりました。小学校は歩いて3分、中学校は自転車で20分の生活を送っていた自分が、そんなに早起きできるかが心配でしたが、いざ始めてみると簡単に起きることができ、4時57分の始発に乗って泥んこの小平に向かっていました。一度も遅刻をしたことはありません。どうして続ける子とができたのか、引退してから考えてみました。

ア式という組織は、プレイヤーもマネージャーも関係なく、部員全員が1部昇格という目標に向かう中で、それぞれが試行錯誤し一生懸命になれる環境です。私はそんなア式の環境に魅力を感じています。最初はサッカーが好きで上手になりたいと思って入部しましたが、ピッチ内だけでなく、ピッチ外においても1部昇格に向けての貢献ができるプレイヤーを目指すようになりました。

自分の中での転機は、大学3年生のときに怪我をしたことです。

この年は膝の怪我により、シーズンのほとんどはプレーできませんでした。初めはサッカーができないもどかしさがあり、他のプレイヤーの練習を見ていると焦りが生まれてきましたが、このままでは怪我をただで終わってしまうと考え、新設された技術ユニットの「自チーム分析班」に加入しました。するとこの1年、練習ではライバルだと思って激しくボールを奪いにいていた仲間と、毎週のTM等で出た反省などを議論する日々になりました。自分はBチームを担当しており、復帰したらこのメンバーでAチームに上がり1部昇格に貢献したいと考え、それがモチベーションになったのです。私はメンタル班でもあったので、プレイヤーと積極的に話し、技術面だけでなく精神面に置いてもサポートするようになりました。

サッカーができず苦しい思いをしましたが、今まで自分のことしか考えられなかった私は、大怪我によりチームメイトの成長、そしてア式の成長を考えられるようになりました。間違いなくこの1年は自分が成長できた年であり、サッカーができなかったにも関わらず、早起きが辛くありませんでした。このような貢献の機会が得られるのは、学生主体でチームを運営するア式ならではの、このような伝統を作ってくださったOBの方々に感謝でいっぱいです。

こうしてサッカー漬けの4年間は、とても充実したものになりました。

勉強などは全然せず、ゼミ面接では“大学にはサッカーしに来てるの？”と呆れられましたが、ちゃんと受かりました。4年間を振り返ると苦しいことがほとんどで、後悔することもたくさんありますが、ア式に入部し毎日5時に起きるという選択をした自分に、後悔は一切ありません。現在は早起きが辛くて仕方がないですが、朝早いリーグ戦があったらOBとして応援に行き、後輩たちの1部昇格を見たいと思います。長くなりましたが、本当にありがとうございました。

*2020年1月29日 4年生の引退試合



やってみて気づいた地域貢献の意義

藤井 俊輔 （4年）



ア式は良くも悪くも、まとまった組織だと思う。

これほど団結力のある組織は珍しいし中にいて、とても居心地がいい。

この4年間の思い出は、ほとんどア式。そういう人間がほとんどだと思う。自分もア式のノリが楽しすぎ、他のコミュニティ（中高とか）のノリについていけなくて悩んだこともある。普段の些細な漢気じゃんけんとか、おめでとう文化、説明なんかしなくても誰かがわかってくれるだろうという暗黙の安心感。よくよく考えたら馬鹿だよなってことばかりだったが、それがすごく楽しかった。これだけ居心地がよかったら、そりゃ外に目なんて向けなくなるよなって納得できてしまうほどに。

しかしまとまった、というのは上手い言い方で、悪く言えば内に閉ざされた組織とも言える。まあ別に自分たちで盛り上がってればいいじゃん、と言ってしまえばそれまでなのだけれども、やはり自分が大学生活のほとんどを懸けてやっているものだし、少しでも色んな人たちを巻き込めればいいなという気持ちは、ずっとあった。そしてア式の熱量は外の人を巻き込めるくらい大きなポテンシャルを秘めているものだと思っていた。だからこそ内に閉ざされた組織文化にどこかすごくもったいないなと思うことが何度もあった。

そんなア式が少しずつ外に目を向け始めたのが、幸か不幸か部活動停止の時期。

停部を契機に徐々に地域貢献活動にも取り組むようになった。やはりあの出来事は色んな意味でア式としてひとつの変わり目だったんだと思う。少なくとも地域貢献活動という点においては、いざやってみれば楽しいと気づく部員も多かったし、その活動自体に部として意義を見出すことができた気がする。

そんな地域貢献活動だが、昨年（2019）夏に小平グラウンド人工芝化プロジェクトについての大学との協議の時期とも重なって（大学へのアピールの名目も兼ねていました）、小平市の小学生を巻き込んだ「スピード・トレーニング教室」をやりたいという話が出た。しかも、アメリカン・フットボール部 CRIMSON と協働で。今までのア式であれば考えられないような話であったが、右田（4年・昨季主将）・菅家（4年・マネージャー）・西山（3年・今季主将）、また CRIMSON の後藤さん・小川君・伊藤君とミーティングをこなす中で、着実に形になっていった。さらには小平市提示型公募事業の学生部門にも無事選出され、（一応コンペ？を勝ち抜きました 笑）小平市から公式に支援をいただくこともできた。

このようにア式と CRIMSON で長期的に計画してきた「スピード・トレーニング教室」。
一度、雨によるグラウンドコンディションの悪化で延期になってしまったものの、
(人工芝グラウンドになればこんなこともなくなります、、、泣)、無事、2019年8月4日に
約20名の小学生を招いて「第1回スピード・トレーニング教室」を開催することができた。
当日は CRIMSON のフィジカルコーチの方もお招きして、小学生に実践的な走り方のフォームを
教えて頂いた。

各チームに部員をつけ個人の特訓やタイムの測定をした後、最後に部員も交えてリレーを行った。
優勝チーム及び好タイムを出した子たちを表彰し、各部のオフィシャルタオルを授与して無事に
幕を閉じた。当日はとても暑く、思った以上に計画していた段取りを踏むことが難しかったが、
部員に多くを手伝ってもらいながら、何とか成功させることができたのではないかと考えている。





実際に自分たちでゼロから地域貢献活動を企画して実行してみると、自分としても、部としても、想像以上のやりがいがあったと感じている。それは私が言葉にするよりも、参加してくださった小学生の親御さんからのメールを読んでもらう方が、より伝わると思うので、その一部を下に引用してみる。

* 昨日はスピード・トレーニングありがとうございました。

大学生の楽しいお兄さんたちと、動画を見ながら分析したり、褒めてもらったり、遊んでもらったりしながら楽しく学べたようです。すぐに結果は出ませんでした、私も教えるコツみたいなものを学べたので、運動会前は〇〇家で極秘特訓したいと思います。

* こどもたちは持ち帰ったパンフレットを毎日の様に見て、“これはアニキだ！”とか、“この人いたね”とか言って楽しんでいます。次回も是非参加したいです。

* 本当に暑い中、熱心かつ楽しく指導して頂きありがとうございました。

本人もフォーム改善でタイムがあがり、表彰されて、とても満足しておりました。また学生の皆さまが挨拶をはじめ、子供たちにマメに声かけをして頂き、凄く好印象でした。次回もありましたら是非参加したいと言っておりました。

* 猛暑の中ありがとうございました。少し早く走れる様になったと喜んでいました。次回イベントも期待しています。

* 先日は暑い中、素敵な教室を開催してくださいまして、ありがとうございました。
 本人もとても楽しく参加しておりました。今回教えて下さいました部員の皆さまにも、
 よろしくお伝えください。最後に一橋大学アメリカンフットボール部さま、
 ア式蹴球部さまの、これからのご活躍をお祈り申し上げます。

* この度は、お世話になりました。
 迎えに行った際に、娘は“やった!! すっごい早く走れたんだよ!! ”と、
 興奮ぎみに報告してくれました。皆さまのご指導が素晴らしく、
 指導を受ける本人に「ずっと」入ってきたのかなと思いました。

* 明日は、いよいよ運動会です。
 リレーの選手になったのでトレーニングの成果が出てくれると嬉しいです。
 ご指導頂き、ありがとうございました。

これらのメールを頂いたとき、心底開催してよかったなと心温まる気持ちがこみ上げた。
 小平という自分たちが活動する身近な地域の方々から応援されることほど嬉しいことはない、
 心から思った。確かに僕たちは大学の一部活でしかない。決して収益を目指して活動している
 わけではないし、言ってしまうと自分たちの自己満足とも言えるのかもしれない。しかし、
 そんな僕たちだからこそできる地域との繋がりには、大きな意義があるような気がする。

僕たちは自分たちができることを精一杯地域に還元し、地域の方々にも日々の僕たちの活動を
 さまざまな形で応援して頂く。損得とかを一切抜きにして、こんな形でお互い支え合いながら
 相互の輪を作っていく。そんな温かい輪を一橋大学ア式蹴球部によって作っていったら、
 どんなに面白いのか、そんなことを夢見ながら、今回の親御さんからのメールを拝読した。
 それでも、まだまだ僕たち一橋大学ア式蹴球部と地域との繋がりには、ほとんどないに等しい。
 今までの地域貢献活動は、ほんのスタートでしかないと思っている。だからこそ現役には、
 このような活動を今回だけで終わらせないでほしいと心から願う。

実際に自分たちで企画しながら気づいたことだが、この部活には想像以上に色んな可能性が
 あると思っている。時間が足りなくて、全てを軌道に乗せることができなかったのは、
 大変申し訳なく思っているが、地域貢献に限らずスポンサー活動だったり、広報だったり、
 フィジカルだったり、メンタルだったり、やれることはたくさんある。ただ究極の目標は、
 やはり勝つことだということを忘れてほしくない。地域貢献活動も、スポンサー活動も、
 普段のフィジカルやメンタルトレーニングも、全てはア式が少しでも多くの試合に勝利し、
 東京都1部リーグ、ないしは関東リーグに上がっていくためのものだと思う。
 そしてア式には、間違いなくその可能性があると思っている。

僕個人としては今後京都大学院に進み、同期のみんなよりは、少なくともあと2年間長く学生でいるので、これからも何かあればサポートしていこうと思う。現役のみなさんは、これからも頑張ってください。活躍を楽しみにしています。OBOGの皆様には、今後も厚いご支援・ご鞭撻のほどをよろしくお願い申し上げます。拙い文章でしたが、ここまで読んで頂きありがとうございました。



4ヶ月越しの対面

大澤 敦（4年）



昔から自分が映っている写真や動画を見るのが苦手だ。

無理やり客観視させられる感じがすごく恥ずかしい。出場した試合の動画はまだ耐えられる。競技力向上に重要なことは分かるし、見ないことで他の部員に迷惑をかけるわけにはいかないから。自分がしょぼいプレーをしたシーンで、“あぁー”って消えなくなるのは、しょっちゅうだったけど。

Flickr は広報の仕事するとき以外ほとんど開いたことがない。

ましてや自分の写真なんて1枚も保存したことはない。そのせいか、LINE のアイコンを自分のプレー中の写真とかに設定できる人を羨ましく感じたりする。さすがに初対面の人と会った時を考えると、自分も部活関係の写真にした方がいいかと思ったこともあったけど、悩みに悩んで最終的に背景画像に設定するのが限界だった。アイコンは地元の大きい公園にあるモニュメントから変えられなかった。ア式的 SNS も、直接ログインすることはあっても、最後まで自分のアカウントでフォローすることはなかったはず。偶然告知やハイライトが流れてきても嫌だったし。広報ユニットに所属していたのは大変なことも多かったけど、その点いつも撮影する立場だったから自分にとっては幸せだったのかもしれない。

そんな僕も引退して後輩から寄せ書きの色紙をもらう番がきた。

書く側のときは好き勝手やって楽しかったけど、いざもらう側になると緊張したことを覚えている。自己防衛のスイッチがオンになった。もちろん気持ち自体はめちゃくちゃ嬉しい。ただ、「こんなように思われてたのか」とか、「そういうふうに伝わってたのか」ってなるのがなんとなく怖い。文章ってノリかマジか分かりにくいところもあるし、これまた客観視させられそうな感じ。それに逆の立場だったら自分みたいなタイプって、結構何を書くか難しい気がする。自分がそう振舞っていたせいなのに、自分でそれに気づいてしまうと無駄に傷つきそう。結局自意識過剰が邪魔をして、ほとんど読めずに帰り、物置の奥の方にしまってしまった。

存在すら忘れかけてた頃、春からの新生活のための引っ越しの準備をしていたら、その色紙が出てきた。約4ヶ月越しの対面。このタイミングで読まなかったら、もう一生読まない気がした。このまま眠らせておくことに関して、さすがにみんながわざわざ書いてくれた善意への罪悪感も出てきた。あともらったときに何となく聞いたけど、自分のやつは色紙全体の飾り付け？も凝ってるほうだったらしい。誰がやってくれたのかは分からないけどありがとうございます。

最近何かの本で読んだ。

人生の醍醐味は、人間らしいことを全て味わい尽くすことらしい。

そして（他の動物と比べたときの）人間らしさとは、他個体との深い協力関係、多様な感性や精神状態、時空間的な制約を越える通信伝達手段らしい。

そういった意味では、

ア式という共同体で様々な出来事を経験した記録を振り返ることができ、ポジティブにしるネガティブにしる豊かな感情が引き出されるだろうこの色紙は、まさに人間らしさを凝縮した価値あるもののように思う。

こんなふう to 心の中で、あーだこーだ
言い訳をすることで後押しを得て、
遂に色紙に向き合う覚悟を決める。
ダンボールに囲まれた部屋で、
おそらく 1 枚目であろうものから読み進める。

.....

全員分ちゃんと読んだことを何度も確認し、
本や漫画をまとめたダンボールの中に大切にしまう。
これは物置の奥にしまっておくにはもったいない。
新居についたらすぐに取り出せる机の引き出しにでも入れておこうと思う。
常に見えるところに飾っておくのはまだ恥ずかしい。



＊秋期リーグ最終戦後の送別会



令和2年度シーズンに向けて

🏆 「懸」 全身全霊を捧げ、1部へ

山本 健太 （3年 新 GM）



3年ぶりの1部昇格を目指すシーズンが始まりました。

今の3年生は「活動停止処分」によってサッカーのできない悔しさを肌で感じた最後の代となります。1部でたくましく戦う先輩方の姿は今でも目に焼き付いており、それだけ1部にかける思いの大きい選手は多く、先輩方の夢も背負いながら、目標達成に向けて取り組んでいます。

今年度のスローガンは、「懸」。

最後の1年、妥協することなく、日々の練習に全力で取り組む姿勢をより一層大切にし、

「ア式でのサッカー人生に全てを懸けて」、1部昇格を成し遂げようという想いを込めました。

新チームとしての初の公式戦であった東京都トーナメントでは1部の帝京大学に競り勝つなど、ある程度の自信につながる経験ができました。しかしながら改善できる点は山ほどあると感じています。個人の技術、戦術はもちろん、この1年で目指すサッカースタイルに対する組織としての理解も足りていません。慢心せずにチーム一丸となって日々の練習に取り組んでまいります。

2月から元Jリーガー・日本代表の戸田和幸氏が新コーチに就任し、指導を仰いでいます。

自分たちが「学生主体」の中で目指すサッカーコンセプトやモデルに基づきながらも、戸田氏のプロのキャリアで得た経験による深い指導はチームのさらなるレベルアップに繋がると確信しています。また戸田氏はピッチ内でのコミュニケーションはもちろんですが、部員一人一人を姓ではなく名前で、時にはあだ名をつけて呼んでくださるなど、とてもフレンドリーに接してくださっています。全員の試合映像を見てくださるなど、このチームの目標に対して全力で共に戦ってくれています。頼れるパートナーと共に1部昇格を必ず成し遂げられるよう、部員一同さらに気を引き締めて日々の活動に取り組んでいきます。

今シーズンの2部リーグには、東京大学、東京工業大学、上智大学など、

学業や環境面で一橋と似た特徴を持つ大学が多く参加します。お互いある種の因縁のようなものがきっとあると感じていますので、熱い戦いをお送りできるのではないかと思います。

是非、会場にてご声援頂けますと幸いです。選手一同、昇格という大きな目標に向かって全身全霊で戦いますので、今シーズンも、ご支援・ご声援をよろしくお願いいたします。



戸田和幸コーチ



《東京都リーグ2部 令和2年度シーズン》

春季：5月～6月（暫定）

秋季：8月～10月（暫定）

対戦校

東大、上智大、亜細亜大、玉川大、武蔵大、
成城大、首都大、理科大、東工大



三商大戦 3年連続優勝！

2020年2月15日 於小平グラウンド

vs 神戸大 △ 1 : 1

vs 大阪市大 ○ 1 : 0

🏈 グッドモーニング、ベトナム

重満 紀章 （平7卒）



昨年4月にベトナムに赴任して1年近くが経とうとしております。
寄付の募集を開始したばかりの人工芝プロジェクトを、同期の神谷君
はじめ皆様に押し付けるような形で当地に参りましたことが心残りでしたが、幸いにして
私がやっていたころ以上の熱気とスピード感で諸事進んでいるようで、改めて神谷君はじめ
皆様に頭の下がる思いを感じております。

6月に大学生の長女を除く、妻と高校生、中学生、小学生の子供たちも合流してくれて
イケイケどんどん怖いものなしの成長国の雰囲気を感じつつ、珍道中ではありませんが、
日々どったんばったんの生活をしております。ベトナム人は、射幸心が強く、例えばゴルフを
やっても日本のキャディーなら安全に横に出せと間違いなく言う場面でも、必ずと言ってよい
ほど一か八かの勝負をけしかけてきます。断ろうものなら意気地なしと言わんばかりにため息を
つかれます。成長国とは関係なく、単に戦争で多くの男がいなくなり、女性が強くならざるを
得なかったお国柄なのかもしれません。

当地のスポーツと言えば、やはりサッカーです。

アメリカと戦ったベトナム戦争なども関係しているのか、あるいは旧宗主国フランスの影響か、
サッカーがメインで野球などは日の目を見ません。もっとも南国の人は、そもそも歩くことさえ
避けるようで、ベトナム人も例外ではなく昼間炎天下でスポーツをする習慣は我々日本人ほどは
無いようです。それでも公園などで少年たちが裸足でボール遊びに興じる姿はよく見かけます。
また、なかなか11人制のサッカーはやらないようですが、ハーフコートサイズでの7人制や、
フットサルは盛んなようです。

ただ、それより何より、ベトナム人の関心は代表チーム。

代表チームの試合がある日は、日本大使館から注意喚起が毎回出るほど街頭は大混雑し、
そここの「ビアホイ」と呼ばれる路上飲み屋に臨時の大画面が設置され、チャンスやピンチの
度に歓声や絶叫が街中に響き渡ります。大金星を上げたりすると、それこそ収拾のつかない事態
になります。次ページの写真は、2018年のアジア大会で決勝トーナメント進出を決めた試合後
の街頭の様子です。



この予選リーグでは同組の日本代表にも 1-0 で勝利しております。その後、準決勝まで勝ち進みましたが、韓国に 1-3 で敗れました。ちなみに優勝は決勝で日本を破った韓国。

順位	Group D	ベトナム	日本	パキスタン	ネパール	勝ち点	得失差
1	ベトナム	—	○ 1 : 0	○ 3 : 0	○ 2 : 0	9	+6
2	日本	● 0 : 1	—	○ 4 : 0	○ 1 : 0	6	+4
3	パキスタン	● 0 : 3	● 0 : 4	—	○ 2 : 1	3	-6
4	ネパール	● 0 : 2	● 0 : 1	● 1 : 2	—	0	-4

R16		準々決勝		準決勝		決勝		準決勝		R16	
パレスチナ 0	8月23日 18:00	シリア 0	8月23日 18:00	ベトナム 1	8月27日 21:30	日本 1	9月1日 20:30	サウジアラビア 1	8月27日 18:00	中国 3	8月24日 18:00
シリア 1		ベトナム 1	8月23日 21:30	パキスタン 0		韓国 0 延長 1		日本 2	8月24日 21:30	マレーシア 0	8月24日 21:30
ベトナム 1	8月23日 21:30	パキスタン 0		ネパール 0		韓国 0 延長 2		日本 1		日本 1	
パレスチナ 0		ベトナム 1	8月29日 18:00	日本 1	8月29日 21:30	韓国 0		サウジアラビア 4		マレーシア 0	
ウズベキスタン 3	8月23日 18:00	ウズベキスタン 3	延長 0	ベトナム 1 PK 3		UAE 1 PK 4	3位決定戦	UAE 0	8月27日 21:30	インドネシア 2 PK 3	8月24日 18:00
香港 0		韓国 3	延長 1	UAE 0	9月1日 17:00	UAE 0		UAE 2 PK 4		UAE 2 PK 4	
イラン 0	8月23日 21:30	韓国 3		UAE 0		UAE 0		バングラデシュ 1	8月24日 21:30	北朝鮮 3	8月24日 21:30
韓国 2		北朝鮮 1 PK 3		北朝鮮 1 PK 3		北朝鮮 1 PK 3		北朝鮮 3		北朝鮮 3	

現在のベトナム代表は韓国人の朴恒緒氏が監督を務めていますが、その前は札幌、神戸、甲府などの監督を歴任した三浦俊也氏が2014年～16までの2年間指揮をとり育成を図りました。ご存知の通り日本人監督としてはタイの西野監督が有名ですが、残念ながらタイもベトナム同様東京オリンピックへの出場権は逃してしまいましたね。ただ90cm近い長身を誇るモスクワ出身のGKをはじめベトナム代表には海外で活躍するタレントもあり、今後も躍進が期待されます。何より依然として仲が良いとは言えない北と南が、唯一サッカーだけはひとつになれるということで、今後も目が離せない存在かと思います。試合を見ていても、日本代表などと遜色のないレベルに見えます。再戦しても、モチベーション次第でどっちに転ぶかわからないと思います。2022年W杯予選も、現在西野監督のタイやUAEを抑えてG組首位。目が離せません。

尚、写真に多く見られるオートバイですが、人口9,600万人に対して4,800万台の保有台数。これは保有世帯としては80%を超え、世界2位だそうです。一般に1人当たりGDPが3,000ドルを超えると4輪車の保有台数が急に伸び始めると言われます。現状の4輪車の保有台数は2輪車の10分の1以下の300万台強。ベトナムの1人当たりGDPは、まさに今3,000ドルを超えたと言われており、今後この名物の光景も様変わりするかも知れません。

ちなみにベトナム人はお酒も大好きです。驚きますが、自分がビール何本飲めるかを男性だったら普通知っています。数えたことないよと答えと、がっかりされます。先のゴルフの話もそうですが、勝負好きなのかも知れません。



サッカーと関係のない話になってしまいましたが、脱線ついでにとどめとして、最近の写真を添付します。私は小学生のころ毎日のように釣りに明け暮れていましたが、15年前アメリカに赴任した際に、新鮮な魚を食べたいという動機で釣りを再開しました。当時はフライフィッシングで鱒を、東京に帰任してからは東京湾で船からアジサバやタイなどを釣っていたのですが当地ではどちらもいません。代わりに取引先に紹介頂き釣りクラブに入ってバラマンディというブラックバスを大きくしたような魚をルアーで釣っています。写真はその釣り堀です。元は湿地帯に作ったエビの養殖場だったようですが、川からの取水口からバラマンディの稚魚がどうしても入ってエビを食い荒らすそうで、であれば、エビは他で養殖しバラマンディを育てて釣り堀にしちゃえという話だったとか。真偽のほどはさておき、子供と一緒に、他の日本人家族などとも一緒にちょくちょく通っています。それでは、この辺で。

皆さん、元気でお過ごしください。



勤務先：ベトナム三井物産有限公司 ホーチミン本店

サッカー部 OB とは言い難い OB？

村上 仁（昭 52 卒）

昨年から昭和 52 年卒の年度幹事を拝命した村上 仁です。

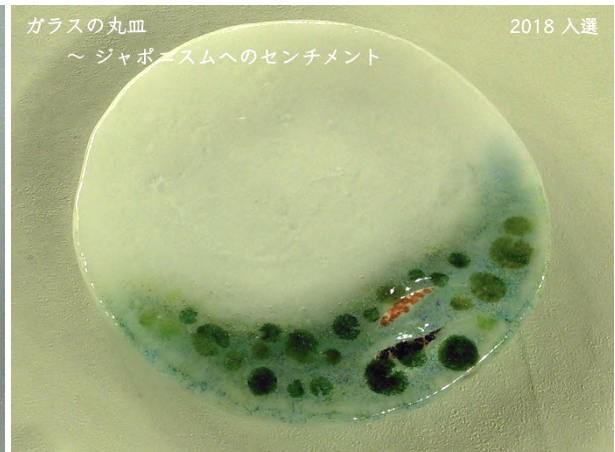
サッカーが好きで、自分を鍛え直したくて入部したものの、体力的にも体格的にも厳しく、2 年になってからは両足の捻挫が慢性化したことも重なって、サッカー部を中退したのは 2 年も終わりの頃でした。入部前は「体育会サッカー部」の過酷さを覚悟していたのですが、諸先輩・同期・後輩を問わず、厳しい中にも温かさや優しさがチーム全体に感じられ、とても居心地が良かったというのが一番強く残っている印象で、もしそうでなければ退部はもっと早まっていたと思います。実際に皆さんに何十年ぶりに会っても昔のように接して頂けることは、本当に有難いと感じています。

やはりサッカーは大好きだったので、社会人になってからは会社のサッカー部で 30 代半ばまで現役レギュラーを続け、その後の香港駐在時も現地スタッフとコンクリート・コートで頻繁にやったミニ・サッカーや、バミューダ駐在時にサッカーボールを購入し借家の壁に向かって蹴っていたことも懐かしく思い出されます。

大学卒業後は損害保険会社に 30 年勤務しましたが、52 歳で投資銀行に転職、翌年買収された先に移籍、リーマンショックにより保険業界に復帰転職、その後コンサル業に転身、といった具合にサラリーマン人生の第 4 コーナーはかなりめまぐるしい展開でしたが、そんな中で、日本酒の美味しさや素晴らしさに触れ、より美味しく冷酒を味わうための「ぐい呑み」が欲しくなったのが約 8 年前のことでした。色々探したのですが、どうしても出会うことができなくて、それならば自分で作ってみるしかないと思い立ったのです。最初は陶器を考えましたが、冷酒を飲むには違和感があり、磁器・漆器等々も同様に、結局行きついたのが「ガラス」でした。

元来がナマケモノなので、「吹きガラス」ではなく、家でもできる「電気炉」による手法を選択したのですが、当然ながらガラス工芸に関わったことは無く、まずは体験教室に行ったのが 7 年前。その後 4 カ月間教室に通って基礎技法を習いました。ところが現在ぐい呑みを制作している技法は、その教室の先生も未経験だったので、ほとんどど独学というか自己流（無手勝流？）になってしまい、世間と隔絶した、引きこもりのガラパゴス状態の制作は、今も続いています。

これは、もしかして「ガラケー」状態になっているのでは、という不安にかられ、毎年東京ドームで開催されているテーブルウェアフェスティバルの、器のコンテストに応募し始めたのが4年前。初回は見事落選、2回目で入選、3回目は落選、今年の4回目は再度入選という結果なので、“世の中に受け入れられない方向に進んでいる訳では無い”とは思いつつも“ガラパゴス進化が珍しいだけでは？”という不安は未だに拭いきれません。



なりゆきで2年前から自宅近くの国立市東に「アトリエ&ギャラリー 仁 (Jin)」という店を始め、ガラスを制作しながら貸しギャラリー、棚貸しの店番をやっていますが、大学で学んだことや社会人経験とは、かなりかけ離れたことであることは否めません。



サラリーマンを辞めてコンサルになってからは、勝手に「(お世話になった) 業界貢献モード」にシフトし、今は月 1 日の 1 件だけ続けていますがそろそろ辞める潮時かと思っています。2 年前からは、またまた勝手に「社会貢献モード」に舵を切り、国立市の検討会、如水会植樹会、如水会支部のイベントに参加、美術部や各美大生 / OB の支援といった活動も始めました。その中で最も重要なのは、遅れ馳せながら、そして及ばずながらサッカー部の支援であり少しでも現役や OB の方々のお役に立てればと思っていますので気軽に店を覗いて頂ければ幸いです。現役および OB は、コーヒー無料サービスです！

今は亡き同期のやすべー（安部裕二君）に誘われ、初めて OB 戦に参加したのが 4 年前。その年はフットサル、東大 OB 戦と初参加づくしで、体力的にはついていけませんでした、やはりサッカーは楽しい！と再認識した次第でした。その翌年に胃潰瘍でサッカーは中断。実は先日、鼠径ヘルニアの手術をしたばかりなのでまだ痛みは残っていますが、体力回復に努めもう一度 OB 戦復帰を目指したいと思っています。



2014 年 忘年会



* 2016 年 東大 OB 戦



海外で出会うサッカー部の不思議な縁

小林 治（昭 53 卒）



大学を卒業してから 43 年の歳月が過ぎようとしている。
あっという間の年月だった。その間、面白いことに、学生時代に同じ
釜の飯を食ったサッカー部の諸氏と海外で再会する機会が度々あった。下の写真は、私が 2 年
の時の夏合宿だが、その中に海外で出会った部員が 8 名もいる。他にも 3 名いて、計 11 名！
卒業後も続くサッカー部の不思議な縁を感じる。、彼らとの出会いのエピソードを紹介したい。

昭和 50 年（1975）夏合宿 於那須



エピソード 1

1983 年 11 月にニュージーランドへ新婚旅行に行った時のこと。

ニュージーランド航空でウェリントンに向かう飛行機の中で、「前の方に河内さん（昭 51 卒）に似た人がいるなあ」と半信半疑であった。ところが、ウェリントン空港で入国手続きを済ませてロビーを歩いていると、バッタリ会った。やはり河内さんだった。河内さんも新婚旅行だった！ その後も河内さんご夫妻とは、旅行中にニュージーランド南島の景勝地ミルフォードサウンドの遊覧船でも、ご一緒した。

エピソード 2

30 代前半、香港に赴任した。

プラモデル製作会社を経営するマモさん（内田守、昭 50 卒）が、おもちゃの展示会に出るために数回来られた。私の家族と共に食事をして頂いた。また当時、上海に赴任されていた克さん（故池田克彦、昭 51 卒）も度々、上海から香港に買い出しに来られた。一緒に食事をさせて頂いたり、奥さまの買い物のアテンドをさせて頂いたこともあった。その後、私が香港から日本へ帰国した後も両先輩には家族ぐるみのお付き合いを頂いている。



エピソード 3

30 代後半、海外出張の多い日々を送っていた。

現地のパリ駐在の方と夕食を終え、“カラオケでも”ということで（多分、日系の駐在員がよく行っている店なのだろう）カラオケ・バーへ行った。私の 18 番、舟木一夫の「高校三年生」と「学園広場」を気分良く歌っていると、向こう正面から“小林！ 小林じゃねえか！”という、どこかで聞いた広島訛りのダミ声が聞こえた。同期のコータロー（田中耕太郎）だった。コータローは、丸紅のパリ駐在だったのだ。

エピソード 4

同じく 30 代後半、出張でフランクフルト経由デュッセルドルフへ行った時のこと。

フランクフルト国際空港から陸路でデュッセルドルフ行きのバスに乗ろうとした時、後ろから“小林さん！”と声を掛ける人がいた。1 年後輩のケイタ（高野啓太、昭 54 卒）だった。何でもこれからデュッセルドルフに赴任するとのこと。2 人で深夜バスの一緒の席で話しながらデュッセルドルフに行った。

エピソード 5

同じく 30 代後半。シンガポールへ出張した。

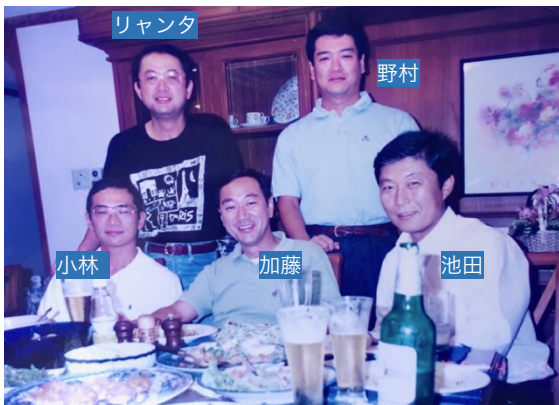
奇しくも同地に駐在していたイモケン（佐藤博子、昭 54 津田塾卒女子マネ）に連絡を取ったら、仕事をしていたシンガポール支店の会議室まで来てくれた。シンガポールリバー沿いのレストランで、南十字星は見られなかったけれども、夕食を取った。イモケンには 15 年後、うちの愚息に彼女所有のマンションを貸してもらった。



エピソード 6

40 代前半、タイのバンコックに赴任した。

同時期にサッカー部のメンバーが不思議とバンコックに集まった。リヤンタさん（高橋良多 昭 51 卒）、ナツンコ（なつ子さん、リヤンタさんの奥さま 昭 52 津田塾卒の女子マネ）、克さん、加藤さん（昭 52 卒）、大西くん・野村くん（共に昭 54 卒）と私の計 7 名。それにシンガポール駐在のイモケンが加わり、私が住んでいたマンションの向いのリヤンタさん宅で、家族も一緒に大パーティーを催したことがあった。

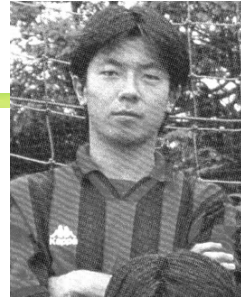


また、マモさんが出張でバンコックに来られた時には、ゴルフ・コンペに行って楽しんだ。当時はタイ発のアジアの通貨危機が発生した時期であり、銀行業務が超多忙を極めた私にとってサッカー部仲間との交流は、あたかも砂漠の中のオアシスの泉のようであった。

「一期一会」という言葉がある。この言葉の本当の意味は、
 “人生において、その機会は 1 度だけであるから、その 1 回の機会を大切にすべきだ”
 ということらしい。大学時代を振り返れば、何度も絶好のシュートチャンスを外し「一期一会」を無駄に使ってきた私だが、今後もサッカー部の諸氏との「一期一会」を大切にしたい。

🏆 オーバーエイジは必要！ VAR には制限を！

進藤 潤耶（平 11 卒 テレビ朝日）



平成 11 年に卒業、テレビの世界に入り、この春で 22 年目を迎えます。人が生まれ育ち、順調に進んできたならば、大学 4 年生になる時間です。そのほとんどをスポーツ中継と共に過ごしてきました。幸運なことに「W 杯や五輪中継」にも携わらせてもらっていますが、こうして数字にしてみると、果たして人が大人になって社会に出るくらいに様々な面で成長してきたのかどうか、疑問&不安になります。ただ一方で、就職の時点では報道の世界でディレクターをしたいと思っていた自分が、実況アナウンサーとしてスポーツにどっぷり浸かってきたわけで、「東京 2020」を終えた後はどうなっていくんだろうという楽しみも湧いています。落ち着きや安定を与えて周りの成長も促す「オーバーエイジ」になっていくのか、忘れていた「ギラギラ」を取り戻し、新しい環境に思い切って挑戦するのか、どうなっているか……。



*ユーロ（欧州選手権）2016 の決勝中継 @仏サンドニ

今回、原稿を書くにあたって、前回の寄稿を読み返しました（西松会新聞 第2号）。

2009年でしたから11年前。当時の日本サッカーは「南アフリカW杯最終予選」の真っ只中で2008年末に体調を崩し代表監督を退いた「イビチャ・オシム」氏について触れています。

“サッカー選手ならば、サッカーに生活の全てを捧げるのが当然”という、口癖のように彼が語っていた言葉は変わらず響きましたが、「（「サッカー選手」を「自分の仕事」に置き換えて臨んでいたのです）“メディアが日本サッカーを強くも弱くもする。あなた方には、とにかく客観的で公平な放送をして欲しい”という彼の願いは、改めて考えさせられるものでした。賛否両論、多々意見があると承知した上で言わせてもらえるならば、私自身は“今は、だいたいイエス”という、これまた微妙な、保身に入った言葉で許して頂きたい思います。

と、どうしてこんな話をしているかというと、

先日「U23 アジア選手権・兼・東京五輪アジア最終予選」に臨んだ日本チームが、まさか？の「予選リーグ敗退」を喫したことに端を発しています。なぜ負けてしまったのか・・・

① 選手？ ② 采配？ ③ サッカー協会？ ④ 相手が強かった？

順位	Group B	勝ち点	得失差	サウジアラビア	シリア	カタール	日本
1	 サウジアラビア	7	+2	—	○ 1 : 0	△ 0 : 0	○ 2 : 1
2	 シリア	4	0	● 0 : 1	—	△ 2 : 2	○ 2 : 1
3	 カタール	3	0	△ 0 : 0	△ 2 : 2	—	△ 1 : 1
4	 日本	1	-2	● 1 : 2	● 1 : 2	△ 1 : 1	—

個人的には、以下のような印象です。

- ① 「心技体」の「心」が整っていなかった ② 専門家の分析に委ねます
 ③ 欧州組が呼べないのは当初から想定内 ④ 五輪出場権を掴んだサウジアラビアをはじめ
 本当に強豪揃いのグループだったのです！

“なんだ、① についての意見だけだし、当たり障りない！”となるでしょうが、やはり高いレベルになるほど、最後は「心＝気持ち・覚悟」の差が勝敗を分ける、というのはラグビーW杯を観ても同じように感じた方が多いと思います。（プロゴルファーの青木功さんは「体・技・心」の順に話をします）今回は「開催国枠」で日本の出場は決まっているという難しさがあつたにせよ、選手たちにとっては「ほぼ最後に近い選考＝最終予選」だったので、監督が大会前から話していたように、「結果を出す」モチベーションは作れたはずですが、さらに残念だったのは「3戦目（最終戦）を終えてから」その言葉が選手達からも出てきたこと。キャリア・経験値を考えれば「初戦前」から「心」を作り上げることは無理だったかもしれないけれど、「初戦後」には「その違い」に気が付き修正して欲しかった、というのが、現地に滞在して共に戦う気概でいた当方スタッフの一致した思いです。

言ってしまうば、私たちだって

- ① 1月にもかかわらず連日 40℃近くまで気温が上がり、キックオフ（20 時過ぎ）時点でも 30 度を軽く超え、しかも蒸し暑い。放送席では汗だくで、資料をビショビショにしながら喋っていましたし、日本の夏の夜に近いものが本当にありました。
- ② 大会関係者の方が多いのではと思うくらいの観客の入り。日本 vs シリアは応援に来てくれる方がいらっしゃいました！が、サウジアラビア vs カタールはゼロ。テンションが上がリません。
- ③ ピッチは連戦で（1 日 2 試合の日も多い）凸凹になり始め、下の土が柔らかいから芝の根付きがあまり良くなく滑りやすい、といった過酷な環境の中で自分たちを奮い立たせ（厳密には私たちに影響しませんが 笑）、W 杯最終予選中継に臨むのと変わらない「大一番前のルーティン」（松木安太郎さんや中山雅史さんも毎試合前にゲン担ぎのカツ定食・カツ丼を食べてくださいました）で、臨んでいたのです。

経験豊富なオーバーエイジの解説陣に引っ張ってもらいながら、おそらく

「声」という面でも、最終戦を除けば、私たちの方が多く、大きく出ていたのではないかと。（これがいかがうかは別として）五輪本大会の 18 人の顔ぶれは分かりませんが「日本」として「今回の失敗」を必ず生かしてもらいたいですし、きっと「繋いでくれる」と信じています。

以上、つらつらと思いつくままに記してしまいましたが、

この 10 年余で、私自身も時に「采配・指導」を問われる立場になりました。

どうしたら「心」をコントロールできるか、自分を追い込めるか、

なぜ「心」が大切なのかということはどうしたら伝えられるのか、日々悩んでおります。

諸先輩（オーバーエイジ）の皆さま、教えてください……。

最後に、今大会は日本チームの「失敗」よりも、

VAR ビデオ・アシスタント・レフェリーの後味の悪さが残る大会として、しばらく語られるのではないのでしょうか。NHK・BS1 でご覧になった方には分からないかもしれませんが、当方（テレビ朝日中継）にとって、今回の放送は、新年の起爆剤とすべきものだっただけに、そのショックおよび損失はかなり大きいものものでした。“松木さんがキレてたね（笑）” という声も多く頂戴しましたが、あれこそ、まさに「客観的で公平な」放送だったと思います（笑）。
“VAR の採用基準は変更すべき！” ですよ？

それでは、東京 2020 イヤーが皆さまにとって素晴らしい 1 年になりますよう、

そして、現役の皆さんが思い切りサッカーを楽しんで、のめり込んで、PA 内でガンガン仕掛けてゴールに結びつけて（VAR はありませんが 笑）、「1 部昇格」を叶えることを願っています！

私も日本の夏を熱く伝えられるよう、日々精進します。

私の学生 LIFE

 「FC ○○○」

齋藤 五樹 （4年）



ア式での4年間を振り返って、私はたくさんのFCに入れてもらったと思う。FCとは、ある目的を持った縦割りのグループのこと。

例えば、餃子好きが集まって餃子を食へに行くFC餃子、温泉好きの人たちでスーパー銭湯や温泉地を巡るFC温泉、FCベースボール、FCアバクロ、FCボーリング、FC動物園、FCマリノス、FCゴルフ、FCゾロ目・・・思い付くだけでも色々なFCにお世話になった。同期には、先輩にたかり過ぎだとか帰属欲求が高すぎだとか言われたりしたこともあるけれど、どのFCも先輩・後輩との距離を縮め、より深い関係にしてくれたと思っている。特に思い出に残っているFCは、FC餃子とFC温泉だ。

FC餃子 は、好きな食べ物を質問されて「餃子」と答えなければ、入部できないことになっている。私は餃子好きではあったが「餃子」と答えた記憶は特にないので、勝手に自分は特別枠で入部が認められたと思っている。餃子好きには面白い人が多く、オフの日集まって昼と夜に1つずつ餃子の名店を訪れるだけでも楽しかったが、昼と夜の間の時間に、商店街を巡ったり、ボードゲームカフェに行ったりと、ただ遊ぶ時間も楽しかった。

FC温泉 に関しては、私は長風呂が苦手なので、“お前は温泉好きじゃない”とメンバーから認められないことも多くあったが、温泉を出た後のお休み処でうたた寝するのが至福の時間で、温泉の楽しみ方は人それぞれだと主張し続けて、何とかメンバーに残っていた。お風呂に入りながらサッカー内外の話をするのが楽しく、最近になって、足首までだけお風呂に浸かるという技を身につけてから長風呂が出来るようになり、その話に加わる時間が増えた。もうちょっと早くこれが出来るようになればよかったと、少し後悔している。

FCに限らず、例えばユニットで食事会を開いたり、最寄り駅が近い人で集まって食事をしたり、ある先輩を尊敬する後輩が集まり、その先輩を囲んで食事に行ったりなど、適当に理由をつけて先輩・同期・後輩関係なく、とりあえず集まって食事をしたり遊んだりすることが沢山あった。この慣習は、ア式が大事にする「良い結果は良い関係性から」という言葉を、正に体現していると思う。後輩たちにはこれからも、何か好きじゃなくても何でもいいから理由つけたFCの文化を残していってほしいと思う。

最後に、4年間で沢山奢ってもらいお世話になった先輩方、私を「FC」のメンバーとして受け入れてくれた方々に感謝したいと思います。最高に楽しかったです。ありがとうございました。



FC アバクロ

@御殿場のアウトレット

アバクロンビー&フィッチという
アメリカのカジュアルなアパレルブランド

FC ボーリング

@池袋のロサボウル



FC 動物園

@富士サファリパーク

事件のにおい、ぷんぷん

石川 晃 （4年）



ア式蹴球部には、いつの時代から存在しているかは存じ上げず、申し訳ないのですが、「FC ピ○○」という高貴な集団が存在します。関西遠征最後の夜を筆頭に、節目ごとに男を磨く誇り高き集団であります。諸般の事情により、名前を伏せることをご容赦ください。写真も掲載できません。私は4年間を通してこの集団に身を置いて参りました。そこで目にした事件は、かけがえのない思い出となっております。

先輩が敗れた相手に再戦を申し込む者、デビュー戦を飾る者、一度も時間内に決着がつけられなかった者、自己を過小評価し低すぎる暖簾をくぐる者、等々。時には隣のブースに案内されることもありました。ただ、やはり何事においても「締め」が肝心です。爽快感に包まれるメンバーと共に囲んだたこ焼きの味は「母の味」であり、キャンディの味は「青春の味」といったところでしょうか。支払った金額以上の経験を得た我々の絆は、非常に固いものだと感じております。

また私は幸運なことに、様々な意見を交換する機会にお招き頂きました。年間で約30万円近く投資し、時には幹事を務めることもありました。その際に得た人脈は私の大きな財産であり、時間をコストとして投資できる学生ならではの貴重な経験を積むことができました。多種多様な価値観を持つ人々と交流を深めることにより、受容力と共感力を養うことができました。現時点ではせいぜい20年強しか生きていない身であります故、経験はまだ浅いですが、これから先の人生において多くの価値観を受容し、それを受け入れていく土壌を築き上げることができました。さらに短時間の間に自己を表現する、幾ばくかの力を見つけることができたのではないかと感じております。これまでの様々な関係者に、この場を借りて御礼申し上げます。

そんな私も、今春から栄えある社会人の仲間入りをさせて頂くこととなります。社会人となる自分はまだ想像することができませんが、社会に出てからも多くの意見を交換し、多種多様な価値観を受容していきたいと意欲を燃やしております。その際には手厚い御鞭撻の程よろしくお願い致します。また、近年盛り下がっているとの噂を耳にした「FC ピ○○」の再興をお願い致します。ただ大事にして欲しいことは、あくまで原点は、男を磨きたいという己の欲求であり、「FC ピ○○」を背負わなければならない、という使命感は必要ありません。あくまで純粋な集団であり続けることを望みます。

申し遅れましたが、卒業が確定した暁には、読売広告社に入社する予定であります。私の進路を最後に、以上で、この寄稿文を締めくくらせて頂きたいと思っております。

僕のア式飲み会人生

下地 政太 （4年）



ア式という組織にハッシュタグをつけるとしたら、#小平グラウンド、#泥まみれ、#学生主体、#追いコン、#早起き、#サイキングアップ、#早起き、#スローガン、#全体飯会・飲み会、#ユニット制、#学年旅行、#応援、#GM 制度、#外部コーチ、#ご飯 LINE と、こんな感じになると思います。どれもア式生活を語る上では、欠かせないものです。僕らにとって、この4年間で温かく連想させるキーワードたちです。

中でも僕にとっては「全体飲み会」が、ア式での思い出の多くを占めているように思います。自分がイベント応援ユニットの一員として、飲み会の企画・進行をしていたということもありますが、どんな飲み会であってもいつも楽しみで、一度飲み会が始まれば一番その会を楽しみきった自信があります。ア式に入ってから4年間、入決飲み、春期秋期終わり飲み、夏合宿、決起飲み、追いコンなど沢山の全体飲みがありました。その中でも僕が今も忘れられないのは、1年の時の春期リーグ終了を祝した飲み会です。

あれは確か、国分寺の居酒屋だったと思います。僕にとって永遠の飲み会番長である西本さん（イベント応援ユニットの1つ上の先輩、以下もつさんと表示）を中心にお店を決め、飲み会を仕切っていました。僕も1年生ながらユニットの一員として、何とか飲み会進行の手伝いできたならなと必死で食らいついた？のを覚えています。

当時の4年生は、今のア式部員からは想像もつかない豪快な人たちの集まりで、飲み会はドンドンと激しさを増していきます。いつも温厚な4年生の先輩は、どこからか〈業務用の焼酎〉を持ち出して周囲の部員の注ぎ歩き、いつも冷静な印象だったGMも溢れんばかりの笑顔で応援歌を歌っていました。会は大盛り上がりの中で終了し、みんなを店外へと誘導します。忘れ物がないかと、みんなが出て行った後の客席をチェックしていた時、店員に声をかけられました。

“幹事の方いらっしゃいますか？”

店員の手には、さっき先輩が持っていた〈業務用の焼酎〉。

“客席から、こんなん出てきたんですけど・・・”

やばいなあと思いながら、急いで、もつさんと呼ばびにきました。2人して、すいませんと謝っていると、戻ってきたある先輩が、

“どうした？ 金なら払う！”

と、財布を開きます。最悪の展開です。店員は激怒。



西本優吉（平31卒）

“そういう問題じゃないんです。厨房に勝手に入って

焼酎を取っていくところを見ました。そんなことをされたら困ります！”

と、先輩が出したお金は突き返されました。早く2次会を手配しなきゃいけないし、

“本当にすいません”

ここで謝れば、何とかかなりそうだ・・そう胸を撫で下ろしました。すると、店を出ようとする僕の横で、なぜか、本当になぜか、もつさんが、怒り始めたのです。

“厨房に入ってくとこ見たのに、何で止めないねん、お兄さんが悪いやろ！”

いや、確かに言いたいことはわかるけど、何でそんなことを言うてしまうんだ。ほとんど収束しそうだったのに、仲間思いの先輩、もつさんらしさ全開ではありましたが、晴れて、もつさんだけが出禁となりました。焼酎を持ち出した先輩も、お金を置いていこうとした先輩も出禁じゃないのに、何も悪いことしてないのに・・あの時の飲み会が、僕のア式飲み会人生で一番の思い出です。

その後も飲み会の場で、もつさんと2人で泣いたり、僕のア式の4年間は、飲み会と共にあったと感じています。卒業後は広告代理店に勤める予定です。飲み会の欠かせない業界だと認識しています。ア式での飲み会の経験を生かし、飲み会の場を使っの昇進を目論んで、春からも頑張っていきます。

こんな事ばかり言っていますが、本当にア式には感謝しています。4年間毎日が充実していました。本当にありがとうございました。それでは、これからのア式の更なる飛躍を祈念し、業務用4ℓペットボトル入りの焼酎で乾杯！



🏆 メキシコが呼んでいる

杉山 恭平 （4年）



最終節を終えて3週間後、僕はメキシコにいた。

ア式での4年間は楽しくもあったが、正直モチベーションが中々

保てない時期もあった。そんな時は長期のオフにどこに旅行に行くかを考え、モチベーションを保っていた。旅に出ることは、日本語が使えない、自分の常識が通用しない環境に身を置くことであり、素の自分で戦わなければならない。そしてその度に自分の至らなさを実感し、それが次なるモチベーションを得ることにつながる。だからこそ旅が楽しいのであり、学びがあるのだと思っている。



引退した後すぐに、どこかに旅に出ることはずっと前から決めていたことで、できれば中々行くことができなかった国にしようと思っていた。そうして選んだメキシコは条件にマッチしていたし、何より治安が悪そうで面白そうだった。迎えた出発日は、卒業に不足している2単位を満たすための試験日だったが、どうとでもなると思って出発した。13時間のフライトの後、さらに5時間バスに揺られ、最初の目的地であるグアナファトに到着した。グアナファトは街自体が世界遺産であり映画『リメンバー・ミー』のモデルにもなった場所である。そこは元々銀山だったので、トンネルなどには採掘された形跡があった。



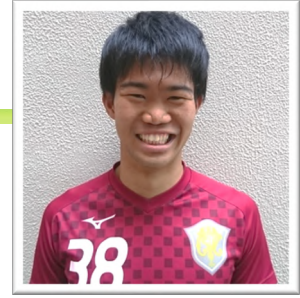
翌日からは首都であるメキシコシティに向かい、テオティワカン遺跡や国立人類学博物館などを訪れて歴史や文化に触れ、屋台でタコスを食べ、本場のプロレスを堪能しメキシコの人々の熱気を肌で感じた。道路が舗装されていなかったり、銃を携行した警察官が至る所にいたり、英語すら通じなかったりと中々得難い経験をする事ができた。発展途上の国であり、メキシコシティは、その地形のために空気が非常に悪く、滞在中ずっと目が痛かったが、いつかまた訪れようと思う。



帰国の2か月後、期末試験を受け忘れた。そのため卒業に必要な数の単位を取得できず、留年の可能性が高くなった。メキシコから帰国した後は、ちょっとのことでは動揺しないメキシコ人を見習おうと思っていたが流石に動揺した。やはり大学生にとって一番大事なのは、「単位をきっちり取得すること」であり、旅行で得られる経験や学びは「単位」の上に成り立っているのだということを学んだ。ア式での4年間はサッカーに限らず、広報ユニットでの活動やスポンサー獲得のための活動にも参加し充実していたが、最後のやらかしにより、さらに濃密な4年間となった。(後日、追試を受けることができました)

温泉としゃぶしゃぶ

中西 望 (4年)



引退のブログにも書いたように、私個人としては、この4年間を通してほとんど何も残せなかったというのが率直な思いです。

初めてのリーグ戦で勝利した時、劇的な逆転勝利をした時、同点ゴールのアシストをした時など心が動いた瞬間は勿論あったけれど、サッカーに費やした4年間という膨大な時間を考えると、やはりあまりに小さすぎると感じます。原因は努力と覚悟が圧倒的に足りていなかった、本当にそれに尽きると思います。これ以上話が広がらないのでサッカー以外のことについて書きますと一番思い出に残っているのは、国立温泉「湯楽の里」と「しゃぶ葉」での時間です。

「湯楽の里」は大学から自転車で15分ほどのところにあるスーパー銭湯で、多い時には週1回のペースで通っていました。入館料は平日880円、源泉かけ流しの露天風呂と2種類のサウナがつき無料Wi-Fi付き休憩スペースで漫画が読み放題という夢のような場所です。学年に関係なく露天風呂につかりながら色々なことを話す時間はとても楽しかったですし、交代浴で水風呂に入るのは毎回勇気がいります。入浴後のお決まりの「コーヒー牛乳じゃんけん」は、ほぼ負けていた気がします。休憩スペースでひと休みし、少し冷たい風を浴びながら自転車で帰る道も好きでした。

＊国立温泉「湯楽の里」



「しゃぶ葉」は国立高校の隣にあるしゃぶしゃぶ食べ放題のお店です。夜でも1人1500円くらいなので1人暮らしの同期や後輩たちと通っていました。でも、最初に飛ばしすぎ後で苦しくなって後悔するパターンを、毎回繰り返してしまうのはなぜでしょうか。また日々の食生活では砂糖の摂取を極力排除していましたが、「しゃぶ葉」は例外です。しゃぶしゃぶとしゃぶしゃぶの間に、きれいにトッピングした自作ワッフルを食べるという暗黙のルールがあったからです。そして「しゃぶ葉」を出た後は、毎回恒例の「ファミマ・オレンジジュースじゃんけん」をします。僕ら以外、絶対に買わないであろう300ml 400円の濃縮還元でない高級オレンジジュースをかけた勝負です。負けると2000円強の出費になってしまうので白熱した試合になります。負けた人は少し機嫌が悪くなりますが、オレンジジュースを飲めばみんな笑顔になります。朝の食事ラインで前日の残りをあげる人がいて笑ってしまいました。

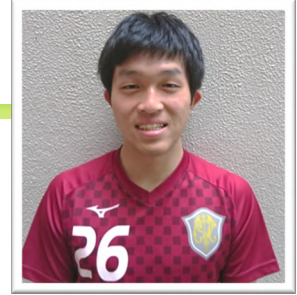
＊「しゃぶ葉」 国立富士見台店



今後はOBの立場としてア式の発展に関わっていけたらと思います。そして4年間支えてくださったOBの方々、本当にありがとうございました。

私をご飯に連れてって

渡邊 友彬 （4年）



「良い結果は、良い関係性から生まれる」・・・これはア式でとても大切にされている価値観です。では関係性を築いていくにはどのような方法があるか。私はその手段を「ご飯」に求めてきました。多くの先輩にご飯に連れて行ってもらい「先輩の小判、金魚のフン」と言われたり、多くの後輩をご飯に連れて行き「先輩風を吹かしている」と言われたり、同期から何度ディスられたのでしょうか。しかし、ご飯を通して距離感が縮まったのは事実。最近学年を超えてのご飯が少ないので、ここで私が参加してきた数々の「飯会」の一部を紹介したいと思います。

単位感謝飯

ア式においては頻繁に開かれる、単位取得に協力してくれた後輩にお礼としてご飯を奢る会です。出席の代返をしたり、ノートを取ったり、試験対策の手伝いをしたりなどの様々な貢献に対して報います。授業ごとに開かれたり学部単位で開かれることもあります。割と一般的な飯会で難易度低めに毎学期開かれます。

B専飯

世間一般であまり可愛くない人のことを可愛いと思う、幸せな感性を持つ部員が集う会です。他人から「B専」と指摘されるだけでなく、自分が「B専」であることを認めていることが参加条件となります。この会は私が2年生のとき、1年生1人、2年生3人、3・4年生が2人ずつの合計8人で開催されました。お互いが可愛いと思う子の写真を見せ合って、“この子やっぱ可愛いよな”と認め合う慰め会です。翌日の部活で飯会で盛り上がった写真をメンバー以外に見せると、“全然可愛くない、感覚がおかしい”と叩かれます。下の写真は、「渋谷肉横丁 みそじ」で開催された「B専飯」です。



決起会飯飯

誤字脱字ではありません。ア式には毎年新人戦の期間に、2年生が1年生を「決起会飯」に連れて行く文化がありますが、その1年生が新2年生になる時に、自分を「決起会飯」に連れて行ってくれた先輩（新3年）と、その先輩を連れて行った先輩（新4年）の3人で集まるというものです。

右の写真は、私が新2年生になる時に立川で開催された「決起会飯飯」です。当初行こうとしていた寿司屋が満席で、近くのすき焼きの店「立川 すえひろ」に変更された記憶があります。名前には決起会とついていますが部活について熱く語るとかは全くなし。ただ美味しい肉を食べまくる会でした。



34 番飯

自分の背番号が 34 に変わることを受け、自分の前に 34 番をつけていた先輩と池袋パルコの「ひつまぶし備長」という店で「サシ (34) 飯」をしました。日付はもちろんサシ、3月4日です。

これまでに紹介してきたどの飯会よりも、他の部員にはしょーもないとバカにされ、呆れられましたが、色々身になる話が聞け、将来の就職についても考えるきっかけをもらった、実は大きな「飯会」です。翌年、私の次に 34 番をつけた後輩を飯に誘いましたが、忙しいという理由で断られ、まだ開催されていません。最初にして最後の「34 番飯」でした。

こうして文字に起こすと、我ながらしょうもない飯会ばかりですが、学年を問わず距離感を縮めることの重要性は、この4年間の部活で強く痛感したことの1つです。しょうもないくくりや理由でいいので、後輩にも是非引き継いでいてほしいと思います。

ア式独自文化

菅家 恵. (4年 MGR)



ア式蹴球部での4年間ということで、
私はあえて「オフな面のア式」について振り返ってみようと思います。
ア式ではその仲の良さゆえか、他団体に比べて独自の文化が形成されがちです。
その中で特に驚いたものを挙げていこうと思います。

日焼け対策

ア式のマネージャーの先輩方の日焼け対策の本気度合いには、
入部当初とても驚かされました。学校での新歓では可愛くおしゃれをしていた先輩方が、
練習に行くと全身を布で覆い、帽子を被り、農家顔負けの格好で部活をしていたのです。



最初は、“これは、さすがに…”とと思っていましたが、
1年の夏に甘い日焼け対策のせいで真っ黒になって
しまっただけからは、私もそちらの仲間入りをしました。
帽子がダサいなどと言われることもありましたが、
そんなことは気にしていませんでした。ただ、後輩
たちは年々日焼け対策が甘くなっています。みんな
もう少しがんばった方が良いでしょう。しかし、
皮肉なことに対策が一番ちゃんとやっている私が、
マネージャーの中で一番黒かったというのも事実です。

応援歌

もちろん他団体でも個人の応援歌は存在しますが、
どちらかといったら、カッコ良いものが多いかと思います。
ただア式の応援歌は、何を伝えたいのかよくわからないものや、
中毒性があるものが、たくさんあります。私が好きな応援歌を例に挙げると・・・

同期の尾高：「尾高よりこうすけ～、こうすけ～、こうすけ～」

1個下の林：「うちの林は日本一、寿司食いねえ～」

これを飲み会の時にコールとして歌うのも、とても楽しいです。
先輩たちと案を出し合って1年次に作るのですが（マネージャー分も）、
これからも独創性の高い応援歌を作り続けて、応援に来るOBたちを笑わせてくれると
期待しています。



おめでとうのおごり

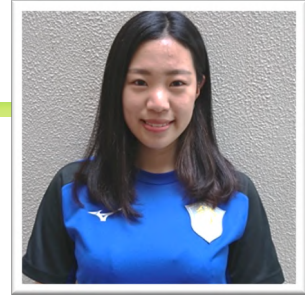
ア式では誕生日など何かおめでたいことがあると、その本人が自動販売機で飲み物をおごります。最初“祝われる側なのに、なぜ…”と思いました。また自販機といえども、部員の数を見ると結構な額になります。特に思い出深いのは、4年次の就活が決まった時の「おめでとうのおごり」です。当時の私は、就活と部活の両立に苦勞し、うまくいかないことや不安なことが多かったのです。そんな時、部活に必死に取り組む部員の姿や春季リーグの熱い試合に、自分も、もう少しがんばろうと奮起させられました。また面接に行くまでの電車の中で、後輩たちが他愛もない話をしてくれたり、同期が励ましの言葉をかけてくれるのが実は大きな励みになっていました。ア式のみんなに支えられて無事就活を終えられた中でのおめでとうだったので、嬉しい気持ちと感謝の気持ちでいっぱいでした。お金は8000円くらい一瞬で消えてしまいましたが、こういう人たちに囲まれて過ごせて、幸せだなぁと実感したことを覚えています。

このように挙げたらたくさんあるア式の変った文化ですが、それも、この部の学年を越えた家族のような仲の良さゆえだと思います。そんなア式の一員でいられたことを誇りに思います。そして、これからも後輩のみんなには、部活に全力を捧げ、その中で、より一層強い絆で結ばれた組織を作っていってほしいと願っています。



現役時代のオフの過ごし方

下川 葵. (4年 MGR)



わたしが大学生生活 4 年間で、1 番エネルギーを使って打ち込んだことは間違いなくア式のマネージャーとしての活動です。

練習や試合といったピッチ内での活動はもちろん、空き時間には広報ユニットの仕事をしたり、夏にはミサガを編んだり、夜に同期とマックに集合してミーティングしたり、大学生活のほとんどの時間をア式に割いたと思います。

わたしが大学生生活の 4 年間で同じくらいの時間と、

もしかしたら、それ以上のお金を使ったことが 1 つあります。

わたしは何かハマると、とことん打ち込みたいタイプで、ア式以外の多くの時間と、ひとり暮らしの大学生が使える最大限のお金を趣味に使っていました。引退した今は、それまで以上に、その趣味中心の生活を送っています。もうここまで読めば、ほとんどの部員が何のことかわかるほど周知の事実なのですが、それが何なのかは、後で書くことにします。

わたしが本格的にお金を使い始めたのは、大学 2 年生になった 2017 年からです。

それまでは YouTube だけで我慢していたのですが、現場に行くようになり、抽選券のために CD を（複数枚）買うようになり、良席のために取引するようになり、しまいにはライブがあるからと 1 ヶ月半で 4 kg の減量も成功させました。なかでも同年の 12 月 21 日～23 日のことをよく覚えています。21 日と 22 日は武道館でライブがあり、すごく良い席で、しかも、かまってもらえ、今まででも 3 本の指に入る楽しいライブでした。

また 2017 年は、サッカー部が「活動停止処分」を経験した年で、

その年から冬オフが短くなったのですが、12 月 23 日は冬オフ前の最後の練習日でした。

その日は小平での朝練で、11 時過ぎ頃に練習が終わったあと、土で汚れた顔と体を急いで拭き、人生で 1 番急いで化粧をし、ダッシュで一橋学園から電車に乗ってビッグサイトまで行き、なんとかハイタッチ会に間に合いました。部停があって活動できなかったり、部活のことで悩んだりした年でしたが、1 年間がんばってきたご褒美みたいな 3 日間でした。

この辺りでアイドルかな？ ジャニーズかな？ と思われた方もいると思いますが、

わたしの趣味は、K-POP アイドルの追っかけです。現役時代のオフは、ほとんどオタクをして過ごしました。社会人になるのを機にやめようかな、と思っていたのですが、ずっと 1 人だけを追ってきたのに、今になって新しい推しを見つけてしまって困っています。これからはちゃんと貯金もできるように、ほどほどに、でも全力で趣味を楽しんでいきたいと思います。

下左の写真は 2019 年 7 月 30 日～31 日のライブ会場、幕張メッセで撮りました。
 写っているのは、わたしが追っかけをしている K-POP グループ「GOT7」のペンライト。
 それに付いているのが、わたしが作った名札のようなもので、マークというのが、
 わたしの 1 番の推しメンの名前です。台湾系アメリカ人なので、アメリカっぽい名前です。
 他にも団扇やボードを作ってファンサービスをもらえるようにしています。



GOT7 のペンライト



親がこれを読むと、“身の丈に合ったお金の使い方をしなさい！”と怒ると思うので、
 保護者には非公開ということで、いかがでしょうか。



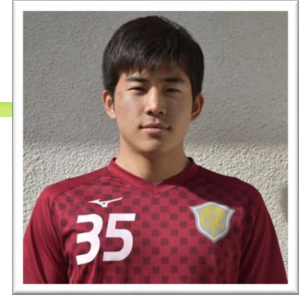
4年 MGR 菅家

4年 MGR 下川



束の間の休息

河原 岳大 （2年）



僕たちは夏に1週間、冬に約1ヶ月の長期オフがあります。
練習や試合の日々から少し離れて息抜きができる、そんな期間です。
ただ難点もあります。夏オフ期間は普通に授業があります。そして夏・冬オフ共にテスト前で2年生フル単（単位を1つも落としていない）3人組のうちの1人である真面目な僕にとっては、どうしてもテストのことが脳裏にちらついて気持ち良く遊ぶことができません。なんだかんだ遊んでしまってテスト直前に大焦りするのですが、本当に大変です。

そんな長期オフに各学年は、学年旅行に行くのが恒例となっています。
僕たちの代は、今までに九十九里浜・箱根・猿島に行きました。今冬の学年旅行は同期の千葉の別荘でした。行き先が別荘であると、阿弥陀くじで決まった幹事から発表されて驚きました。別荘なんて馴染みがありません。車は自家用車で行きました。学生の財布に優しい激安旅です。

初日の日中は、Amazon プライムビデオが配信している番組「ドキュメンタル」の企画、「密室笑わせ合いサバイバル」を行いました。簡単に言うと、各々が一定の金額を持ち寄り、お互いを笑わせて最後まで笑わなかった人が賞金を獲得できるというものです。これが予想以上に盛り上がりました。すぐ笑ってしまう人もいますが、みんな頑張って笑いをこらえます。特にマネージャーは、すぐ笑います。結局夕飯まで戦いは続き、優勝者が決まりました。下ネタは最強のお笑い道具であると改めて感じさせられた戦いでした。

また今回の学年旅行は、いつもと違う点がありました。
全員が20歳以上になり、みんなお酒を飲むことができます。
先輩には、お酒を飲むようになってから存在感が増し、飲み会をするようになってから“〇〇が入部した”なんて扱いをされている人もいたので、もしかしたら、同期にも飲んだら面白い人がいるかもしれないと思って臨んだ旅行だったのですが、肝心の僕自身がお酒に弱く、まだみんなが酔ってないのに全身が真っ赤になり、眠りに落ちました。たっぷり10時間も寝てしまいました。次の日の安全運転を考えればベストコンディションですが、周りからしてみれば、早く寝てしまってつまらない奴だったと思います。
お酒を上手く飲むということが、今後の目標になった学年旅行でした。

なんだか小学生の日記みたいな文章になってしまいましたが、読んでくださってありがとうございました。今の部員はこんな感じというのが、少しでも伝われば幸いです。冬のオフを経て気持ちがリフレッシュできました。新シーズンは、今まで以上に自分を追い込んでいきたいと思います。

不足

山口 健介 (2年)



大学2年生の秋冬学期が終わり、大学生活もあと半分程度だということに気づきました。時が経つ早さに驚かされます。一橋大学に入学してから部活・勉強・バイトなど、なかなか濃い生活を送ってききましたが、まだまだ何か足りない、不足しているなと感じます。サッカーの技術面や大学の単位数は、もちろん不足していますが、ロマンスが最も不足しています。ご存じの通り一橋大学は、文系大学にもかかわらず女子生徒が非常に少数です。なおかつ私は経済学部のため、ゼミでの女の子との関りも期待できません。学内で話せる女の子は、部活のマネージャーさんだけというのが現状です。他の部員もそんな悲惨な状態に危機感を感じているのか、「希望や条件が合致する人同士を結び付けるモバイルアプリ」に手を染めています。

出会い系アプリと聞くと危険なイメージを持つ傾向にありますが実際は健全にデートを楽しむことができる優良アプリです。私自身もそのアプリを使って女性と出会い、食事を楽しんだりプラネタリウムを鑑賞したりしました。全く異なるコミュニティに属する方と接するのは新鮮で、とても楽しかったです。



しかし、アプリで出会った方とデートを楽しんでも(左と下の写真)、まだ何か不足していることに気がつきました。中学校、高校の時に感じた「ときめき」、これが不足していたのです。たとえば・・・授業中に意味もなく好きな子を目で追ってしまう、席替えで無駄にドキドキする、一言話せただけで上機嫌になる、今思うと非常に気持ち悪い行動の一つ一つに「ときめき」が含有されていました。

今でもそういう恋愛を繰り広げている同期がいますが、とても微笑ましく、うらやましく思います。付き合っている彼女と安定期を迎えている同期、成人式で再会した中学の子と、いい感じの同期、今年こそは彼女を作ると意気込む同期、乃木坂大好きな同期、恋愛に1ミリも興味のない同期・・・それぞれの大学生活が悔いのないものとなることを願っています。



 故清水征四郎君の霊に捧げる

田中 好輔（昭41卒） 甲斐日産自動車（株）取締役会長

清水君、残念でなりません。

一橋のア式蹴球部並びに西松会を通じて、わが世代の中に聳え立つ高い峰であった貴君。誰もが尊崇の目を向けていた貴君が、こんなに脆くも先に異界に旅立つなど、全く想定外、順番違い、信じたくもないのが率直な気持ちです。とはいえ約2年前でしたか、二度目の手術の後には体調儘ならず、これまでとは違う活動パターンを余儀なくされ、小生の中にも先の心配が心を過ったこともありましたが、敢えてそんな気持ちは余計なことと打消してきたというのが正直な所かも知れません。

旅立たれた貴君の気持ちはどうだったのか？ まだまだ遣り残したこと、心残りなこと、たぶん多かったと思います。とはいえ、小生など俗物の目から見ると、大学1年生、サッカー部入部の頃からの貴君の生き様を見るにつけ、やりたいことを、それも他人の中々真似出来ないレベルでやりこなす、そういう図抜けた力量を文武両道に亘って発揮していた貴君だったので、余程小生なんかよりはサバサバした気持ちで、旅立たれたのかと勝手に推量しています。

昭和37年の4月、小平のサッカー・グラウンドで新入部員として合いまみえたのが、貴君との出会いでした。栄光学園が関東インターハイに駒を進めた際のエースだと聞きました。甲府の田舎高校出で一浪の小生に引き比べ、ごろごろ居る普通の一橋生とは全く違い、骨太くも都会タイプの優駿男、それが貴兄に抱いた小生の印象でした。入部早々からインナーでしたか、レギュラーポジションを得て、目覚しくも羨ましい活躍を目の辺りにしました。夏場の三商大戦・関西遠征には、唯一人貴君は1年生として選抜されました。まこと敬虔なカソリック信者で、小平合宿の時は、独り早起きをして教会のミサに出て、何食わぬ顔で朝練に臨むというスタイルでした。まさにサラブレッドでした、格好良く、輝いて見えました。

当時は貴君も青春真っ只中。余り知られていませんが、2年生へ進級の前、文と武の岐路に立ち、持てる者ゆえの深刻に悩む時期があったと拝察します。というのも2年の時にサッカー部を休部されたからです。外交官を目指そうとしたのではないか、勝手にそう思っていました。しかし3年生となって復部されたのでした。上級生からの働きかけもあったことでしょう。当然、復部すればプレーでもチーム運営でも周りの期待があり、抜き差しならぬ立場に立つ、そのことを熟慮されたうえだった筈です。この辺りの貴君の気持ちの整理や思考、心理の動きなどは、レベルの違う小生などには測り兼ねるものがあり、やや遠巻きに見ているしかなかった自分を思い出し、慚愧に堪えない気持ちです。

昭和39年のリーグ戦が終わり、我が学年の運営体制が組まれる際、主将は貴君以外にないのは衆目一致する所で、古川主将の指名も貴君でした。休部のことがあったので、貴君の気持ちには多少の迷いがあったのかなと思います。今も後悔するのはグランドマネジャーに適材を欠き、貴君に練習のプラン立てと笛を吹かせること迄押付け、負担を加重してしまったことでした。残りの四年生4名が精一杯バックアップするという建前ながら、大変不甲斐なくも申し訳ないこととなってしまった。今更ながら、もっとキチンと謝って置けば良かったと思います。

昭和40年のリーグ戦、関東第2部での苦戦を克服して残留できたのは語り草といえるでしょう。最終戦の農大戦に一か八かのギャンブル戦術・体制を布き、それに勝利してリーグ残留を決めることが出来た。その試合には、貴君の逡巡を圧して、1年生として実力を養っていた貴君の弟、幸男君（彼は、就職先としては小生の後輩＝興銀マンとなりました）の抜擢が奏功したのは、大書して置きたい。

話して置きたかったこと、あんなこと、こんなこと、思い起こせば次々に沸き上がってきますが、そう遠くない時期に小生もそちらの門を叩くことになるので、その時のために取って置くこととしたい。清水君、その時迄首を長くして待っていて下さい。お願いします。
ご冥福を祈りつつ、駄文を終わります。



昭和41卒メンバー 前列左から

堀江正郎・斎藤泰敏・田中好輔・清水征四郎・相良保彦

一橋大学ア式蹴球部のレジェンド 清水さん

高峯 文世（昭43卒）

敬愛する先輩、清水征四郎さんが、昨年10月に肺癌で亡くなりました。
私がア式蹴球部に入部した時の3年生でチームの中心選手、帰りの経路が一緒だったので親しく語り合わせていただいたこと、グラウンド・試合での思い出が、沸き上がってきます。

4年生の古川主将（昭40卒、三菱商事・故人）から最後のリーグ戦試合終了後、次期主将の指名を受けられた清水さんは、暫く日が立って、新体制の練習に入る前にGMを兼務することを宣言。それまで主将とGMは別々で、GMが主将と相談して練習メニューを作り、グラウンドではGMが笛を吹いて練習を仕切っていましたので、下級生は皆驚きました。清水さんと同期の新4年生は5名で、主務の堀江さんをはじめ4年生（田中、斎藤、相良の各先輩）は皆レギュラーで、清水さんを献身的に支える体制を敷いているとのことでした。

＊昭和40年（1965） 夏合宿 於小平



それまでの練習も伝統的に厳しく激しいものでしたが、主将自らが先頭に立って笛を持ちながらのダッシュ・ターン、インターバル走をされるので、全く気を抜けない緊張感が漂っていました。基礎の各種キック、ボール回し、フォーメーション、練習の最後は短い時間で津田塾往復、長い時は朝鮮大学往復のランニング。そのような練習で春季はそこそこ手ごたえがありました。本番のリーグ戦に入ると思わぬ苦戦続きで、最終戦の東京農大に勝利しないと入れ替え戦に・・・とにかく点を取らねばと、いつもは下がり目のポジションの清水さんが CF に入る、今までにない超攻撃的な布陣で臨みました。下の写真が、その試合です。

昭和 40 年 (1965) 11 月 20 日

関東リーグ 2 部の最終戦 vs 東京農大 於駒沢第二競技場



清水 (4 年 CF)

高峯 (2 年 FW)

私の記憶では、早い時間帯に先発 2 試合目の 1 年生、清水幸男 (清水さんの弟) の左からのセンタリングを兄の清水さんがヘッドで決めて一気に勢いづき、2 点目か 3 点目か定かではないですが、私が相手バックスと競り合い、何とか頭に当たったボールが前に出てきた GK の頭越しにゆっくりした弧を描いて右ゴール隅に。3 : 1 で完勝！ 2 部残留を決めました。清水主将と握手したのは、今でも忘れられません。

(最終順位は 6 位)

卒業後、三菱商事に入られ、直ぐに商事のサッカー部の主力として東京都社会人リーグでも活躍され、その後ニューヨーク支店へ。そこでも一橋大ア式蹴球部の高場（昭43卒）、山崎（昭49卒）たちとの会合のリーダーだったと、又帰国後は「栄光学園」OBのチームで長くプレーされておられたことも栄光学園OBの方々から聞いております。

最後に一緒にプレーしたのは、2014年11月1日、横浜スタジアム隣の人工芝グラウンドでの「三商大OB戦」。小雨模様で参加者が少なかったが、清水さん（MF4年）、高峯（FW2年）、有田稔（BK1年）が40数年振りに小平グラウンドでのリーグ戦当時を思い出しながら、3人同じチームでパス回しをして、私が前に飛び出すと清水さんからスルーパスが・・・しかしゴールを決められず、神戸大、大阪市大にも0：0の引き分け。この試合には安部（昭52卒 2018年5月逝去）たちも一緒だった。横浜スタジアム内の「レストラン」での懇親会でも清水さんがリーダー格で、昔の三商大戦や皆の近況など語り合ったのも思い出されます。

清水さんは「西松会副会長」も務められ、学生の公式戦への応援も、OB総会も、殆ど欠かさず出席されておられました。2011年3月1日の西松会新聞に〈OBのつぶやき〉として寄稿され、『あと1歩のブレイクスルーとは』と題し、当時の日本代表監督ザッケローニの言葉を引用しながら、次のように述べておられます。

それまでの「相手を恐れて守り倒す」戦法から「相手を恐れなくて攻撃していく」という方向性に変わった。ボールを奪ったら素早くカウンターで攻めるという点が、今回のアジアカップ優勝に繋がったのではないかと・・・

まさに、あの東京農大戦の思い切った布陣を思い起こしました。

小生はここ数年、現役学生の公式戦の大部分を観ていますが、1部昇格の目標を達成するには、プレーの質をもうワンランク上げることを大方針として1年間努力することが必要ではないか？と思います。

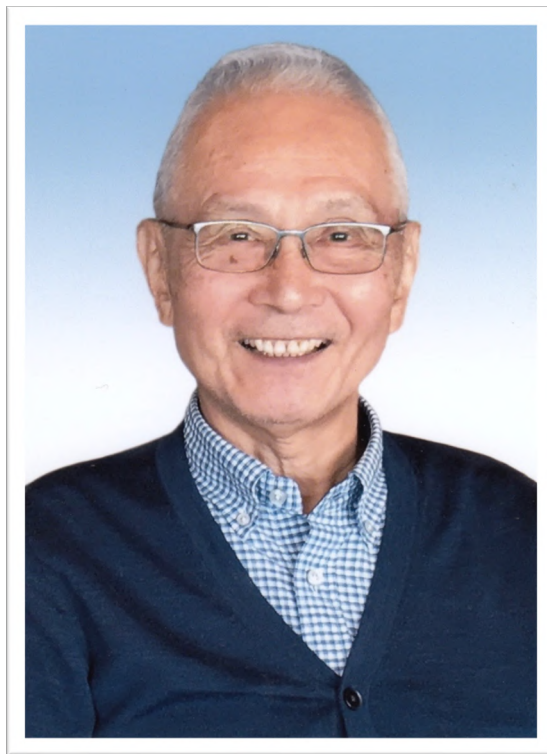
又、つい数年前も「検査入院中なのだが、時間があつたので・・・」と東工大グラウンド（成城戦か？）へ応援にいらっしゃったことがあり、一橋大学ア式蹴球部への熱い想いには本当に頭が下がりました。応援の後でも勝敗にかかわらず必ず学生に暖かい言葉をかけていたのが目に浮かびますし、入院前はその後何時も我々と「一杯飲み」にお付き合い頂き、サッカー談議を交わしたことも懐かしく。

葬儀は、四谷のカソリック教会で行われ、
ご親族、教会関係、栄光学園、三菱商事、一橋大学ア式蹴球部の関係者が多数参列され、
厳かに、且つすがすがしい雰囲気の中で執り行われました。

4年生、特に清水さんは小平での合宿中、日曜日の早朝、皆が未だ寝ているうちに
そっと起きて吉祥寺のカソリック教会の早朝ミサに行かれ、午前中の練習前には戻られていたのも
知っておりましたので、笑顔で送り出せたことが私として嬉しく、強く印象に残っております。
一橋大学ア式蹴球部OB会 緒方徹会長（昭49卒）からの弔電も、我々の清水先輩への
感謝の気持ちがこもった素晴らしいものでした。

フベルト・征四郎さん安らかに・・・

一橋大学ア式蹴球部後輩たちのへの応援は、清水さんの遺志を継ぎ、我々が続けていきます。



清水 征四郎（昭41卒）
令和元年10月13日 逝去 享年75



緒方 徹（昭49卒 西松会会長）

葬儀の際、清水先輩の奥さま宛に以下のような弔電を送りました。

清水征四郎様のご訃報に接し、
お悔やみを申し上げますとともに、衷心より哀悼の意を表します。
清水先輩には、一橋大学ア式蹴球部の西松会の活動において大いなるご貢献を
いただきました。現役の試合にも数多く足を運んでいただき、現役やOBに
気さくに声をお掛けになり、温かいお言葉や鋭いご指摘をいただきました。
私も度々励ましていただきました。深く感謝申し上げます。
お別れは誠に残念ではありますが、どうぞ安らかな旅立ちとなりますよう、
心からお祈り申し上げます。

清水先輩とは、観戦のあと“検討会”と称して他の先輩・後輩方とも一緒に
午餐を度々ご一緒しました。お酒もお好きでしたので、談論風発。そこでも感じたのは、
本当にサッカーが好きでいらっしゃるということ、そして会話に流れる温かいお人柄でした。
現役の試合に心躍らせる一方で、鋭い指摘に「おっ」と思うことも度々でしたが、
清水先輩の懐の深さを感じたものです。



山崎 彰人（昭49卒）

征四郎さんには、西松会代表幹事を長く務めた際、副会長として大変お世話になり、
ご指導いただきました。個人的にも親しくさせていただき、NYに駐在されていた頃には
お宅にお邪魔しましたこともあります。生前の征四郎さんと交わした高峯先輩、
清水幸男先輩との会食の約束もついに果たせず、無念の至りです。



加藤 富朗（昭52卒）

征四郎先輩の訃報に接し、心よりご冥福をお祈り申し上げます。
先輩には就職時に色々と相談に乗っていただいたことを思い出します。合掌

🏈 試練の年、だからこそ！

福本 浩（昭 52 卒 編集長）

寄稿してくださった OB、現役の皆さん、ありがとうございました。

これを書いている 2 月末日、新型コロナウイルスが猛威を奮い、感染が拡大しています。

様々なイベントが自粛され、小中高が休学。東京オリンピックの中止も懸念されています。

気が滅入る毎日ですが、こんなときだからこそ、夢を見ましょう。

今こそ OB の力を結集し、小平グラウンドの人工芝化を実現しましょう。

来年の 3 月、美しく緑に染まったグラウンドでボールを蹴り、酒を酌み交わす夢を見つつ・・・

